

版画学会

2026

全国大学版画展第50回記念特別号

「記念展示 現在版画の対話」記録集

The Japan Society of Printmaking

<http://www.cuapsj.org/>

記念展示 現在版画の対話

← 上田市立美術館
コレクション展



全国大学版画展第 5 0 回記念特別号

「記念展示 現在版画の対話」記録集

版画学会
2026

The Japan Society of Printmaking
<http://www.cuapsj.org/>

はじめに

1974 年に「日本の美術大学における版画教育の進歩発展と版による造形表現の研究」を目的とする大学版画研究会（現・版画学会）が発足し、その活動の軸として 1976 年に第 1 回全国大学版画展が開催されて以来、今回で 50 回という節目を迎えました。

このたびの特別展「記念展示 現在版画の対話」は、その記念として開催した展覧会です。

学会員の中から選出された将来を担う作家 22 名の作品を展示して現在の状況を見せるとともに、版画学会の沿革をパネルによって提示し、加えて第 1 回から前回までアーカイブされた膨大な大学版画展受賞作品の画像を映写しました。

そこには、作品との対話はもとより、版画学会の活動とその道程など、様々な観点からあらためて版画との対話が生まれる場としたい、という思いが込められています。

その展示と会期中に行われたイベントを記録し、今後の学会活動の進展に資するべく、版画学会誌特別号を刊行します。

目次

02	はじめに
03	目次
04	主催者あいさつのパネル
05	作品展示 出品作家 浅沼 香織／石橋 佑一郎／岩渕 華林／大坂 秩加／大橋 朋美／大森 弘之／長田 奈緒／ 勝木 有香／金城 徹／田代 ゆかり／常田 泰由／所 彰宏／中村 美穂／東尾 文華／平野 有花／ 松元 悠／宮本 承司／本村 佳奈子／山口 茉莉／鷲野 佐知子／ワタナベ メイ／王 木易
28	出品作家略歴・コメント
38	版画学会沿革 1974 -2025 のパネル
50	全国大学版画展受賞作品アーカイブについて 中村 桂子（東北芸術工科大学）
51	全国大学版画展 歴代受賞者一覧のパネル 1 回 (1976 年) - 49 回 (2024 年)
60	講演「山本鼎の創作版画」 山極 佳子（上田市立美術館学芸員）
68	クロストーク 野口 玲一／大坂 秩加／大橋 朋美／長田 奈緒／常田 泰由／東尾 文華／松元 悠／王 木易 進行：遠藤 竜太
82	作品展示部門の出品者の選考について
83	展覧会開催経緯および実行委員会組織と実施体制
84	編集後記 学会活動の省察と展望 ― 50 回記念特別展を振り返って― 遠藤 竜太（武蔵野美術大学）
85	奥付

「第 50 回記念 全国大学版画展」
「記念展示 現在版画の対話」
ごあいさつ

「全国大学版画展」第 50 回を記念して特別展を開催します。

昭和 49（1974）年、日本の美術大学に版画教育の進歩発展をはかることを目的に、
「大学版画研究会」が発足します。昭和 51（1976）年に第 1 回の「大学版画展」が、
18 校の参加により、大坂フォルム画廊東京支店で開催されました。

昭和 61（1986）年に「大学版画研究会」は「大学版画学会」となります。翌年の
第 12 回「大学版画展」から会場は町田市立国際版画美術館へと移り、平成元（1989）
年の第 14 回から「大学版画展」の名称は「全国大学版画展」に改められています。

平成 25（2013）年には、版画全般の研究・検証を行う学会を目指し、大学の教育
現場関係者を中心する構成を超えて幅広く人材を求めるために、「大学版画学会」
は「版画学会」に改組されました。一方で「全国大学版画展」は、版画芸術の発展
と全国規模での版画教育の充実をはかるため、事業の一環として維持されています。
令和 3 年からは上田市立美術館で開催されるようになりました。

これまでの取り組みを検証する機会として、「記念展示 現在版画の対話」は三つ
のセクションから成り立っています。「U45 展示」では 45 歳以下の、学会のこれ
からを担う作家たちが、全国から選抜されて出品しています。「版画学会沿革 1974
–2025」では、これまで刊行してきた学会誌を中心として、研究会・学会の活動の
経緯をご紹介します。「全国大学版画展受賞作品アーカイブ」は、大学版画展・全
国大学版画展の受賞作品を網羅した画像展示となります。膨大な量となるため 10
年ごとに紹介しています。これらの軌跡を見直すことを通して、学会の将来への展
望を得る機会となれば幸いです。

主催者

「現在版画の対話」
作品展示
出品作家



浅沼 香織 / ASANUMA Kaori
drawing depth
2024
ステンシル
90 × 90 cm



石橋 佑一郎 / ISHIBASHI Yuichiro
LIFESAVER
2024
木版画
60 × 80 cm



岩渕 華林 / IWABUCHI Karin
Orchid Children
2023
ミクストメディア（和紙に墨、岩絵具、アクリル、シルクスクリーン）
100 × 80.3 cm



大坂 秩加 / OSAKA Chika
笑顔でさらば / Goodbye with Smile
2019
リトグラフ
82 × 62 cm



大橋 朋美 / OHASHI Tomomi
 record of memory reconstruct dairy records and extract new records.no.1
 2025
 銅版画、デジタルプリント（エッチング、デジタルプリント、雁皮刷り）
 107 × 77 × 4.5 cm



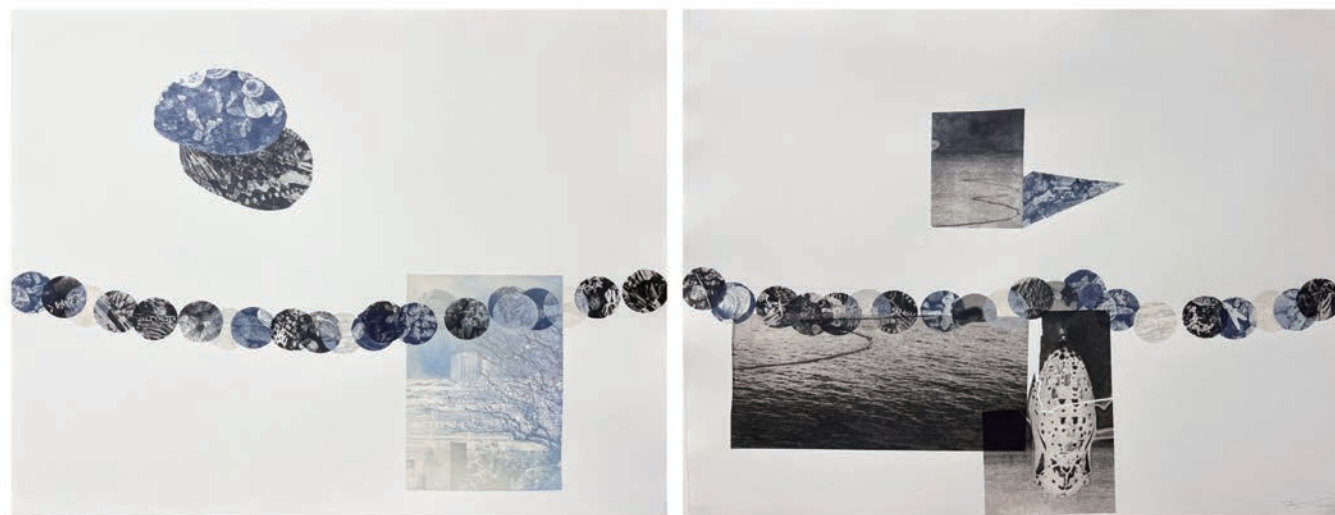
大森 弘之 / OMORI Hiroyuki
 The view outside the window that day
 2025
 銅版画（メゾチント）
 90 × 60 cm



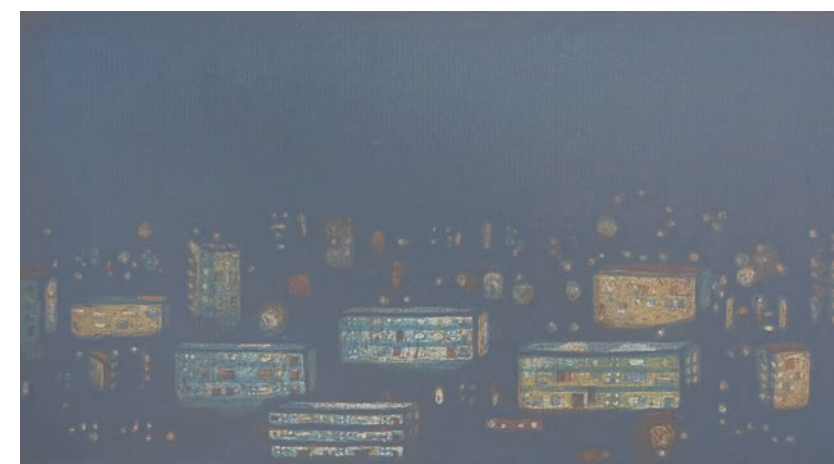
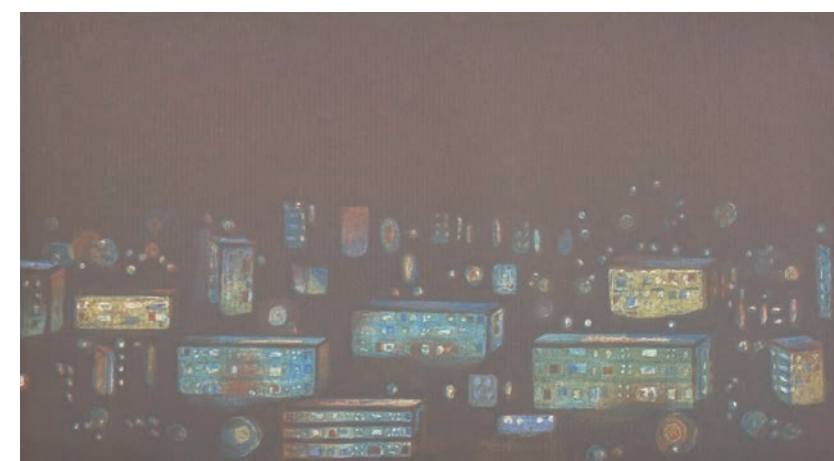
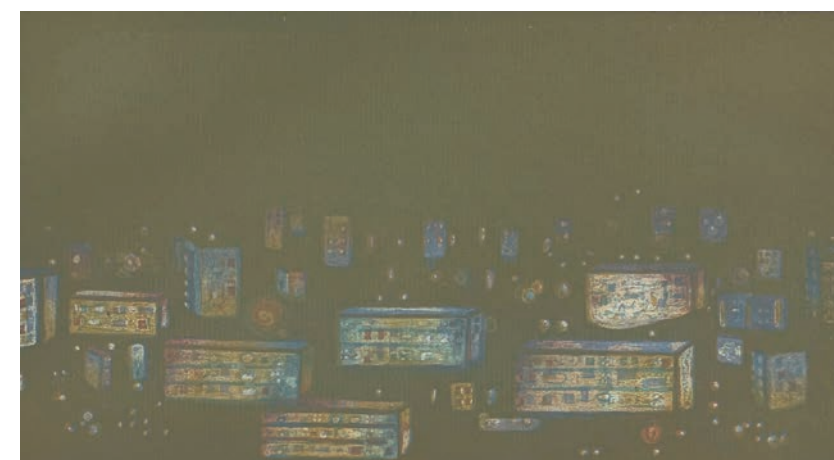
長田 奈緒 / OSADA Nao
 Padded Mailers (amazon_spCY0004075, spCK5707140, spCM2588508)
 2021
 シルクスクリーン（アクリル板にシルクスクリーン）
 右から 35 × 35 × 0.5、35 × 27 × 0.5、35 × 27 × 0.5 cm
 Photo by Osamu Sakamoto, Courtesy of Tomio Koyama Gallery



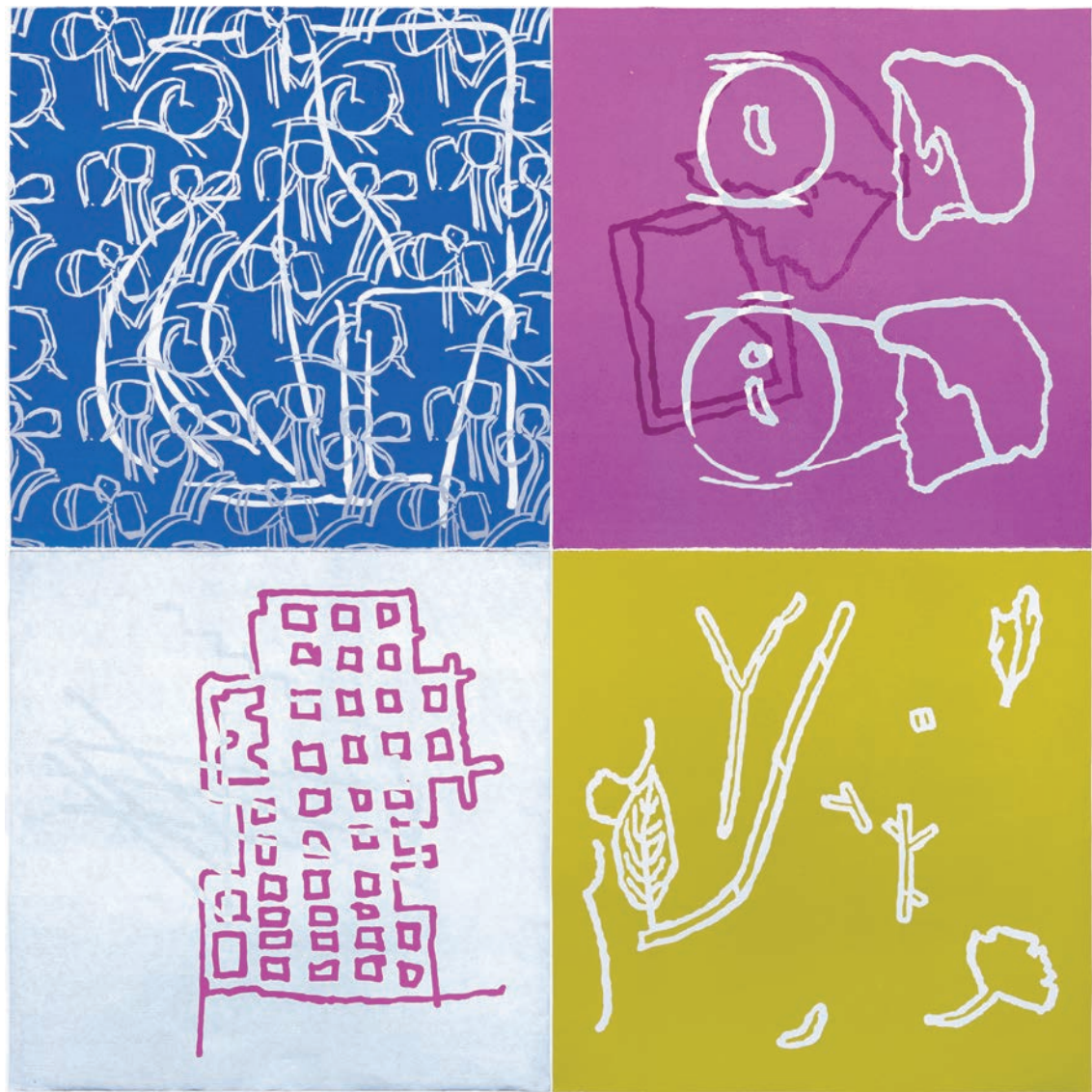
勝木 有香 / KATSUKI Yuka
 Leaflit
 2025
 シルクスクリーン
 97 × 130 cm



金城 徹 / KINJO Toru
 あの日の線は紡いだ記憶 / The lines I drew on that day are spun memories
 2025
 銅版画
 42 × 50 cm 2 点



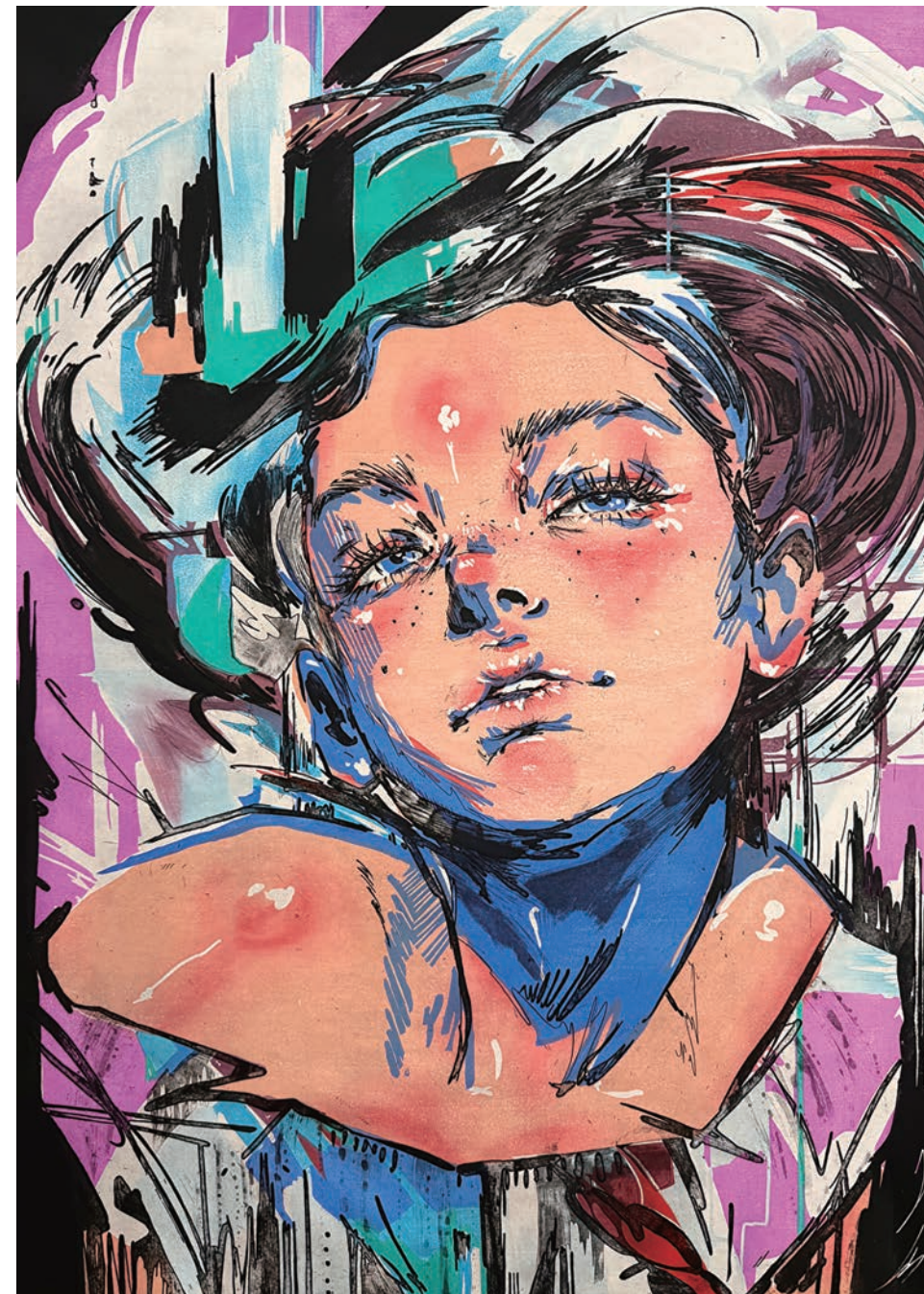
田代 ゆかり / TASHIRO Yukari
 うつりかわり / change
 2025
 コラグラフ
 14.5 × 26.5 cm 3 点組



常田 泰由 / TOKIDA Yasuyoshi
 refind
 2024-2025
 木版画
 128 × 128 cm



所 彰宏 / TOKORO Akihiro
 夜釣 / Night Fishing
 2025
 サイアノタイプ
 112 × 162 cm



中村 美穂 / NAKAMURA Miho
Echo in the Memory 3
2025
木版画
100 × 82 cm

東尾 文華 / HIGASHIO Ayaka
これからの未来へ向かうあなたへ / To You, Heading Toward the Future
2025
水性木版画、銅版画
84 × 60 cm



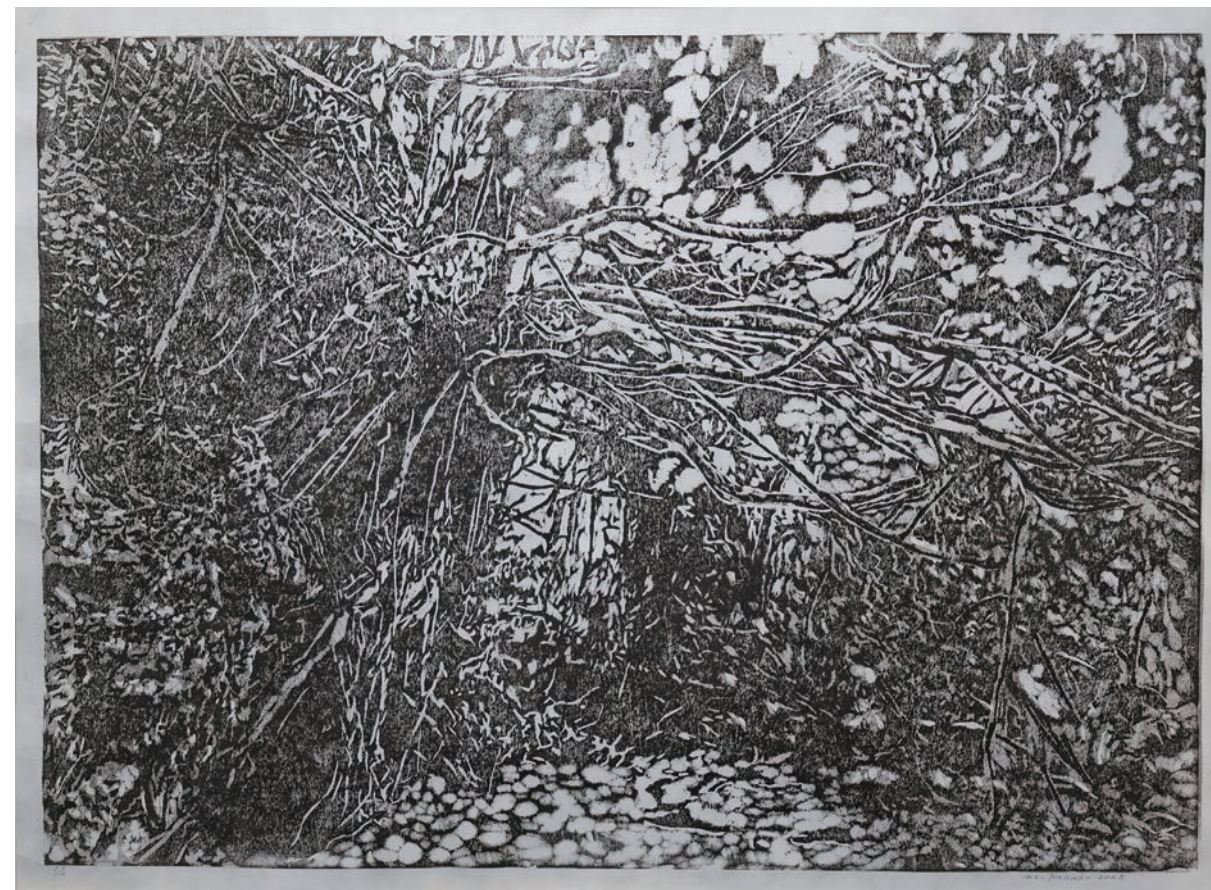
平野 有花 / HIRANO Arika
Heartbeat Wave
2025
木版画
60.5 × 91.5 cm



松元 悠 / MATSUMOTO Haruka
こどもと料理がしたい / I want to cook with my child
2025
リトグラフ
75 × 90 cm
撮影 | 花戸麻衣



宮本 承司 / MIYAMOTO Shoji
カイス / nolemretaW
2025
木版画
80 × 50 cm



本村 佳奈子 / MOTOMURA Kanako
痕跡 2025.9.15 hamahiga / trace2025.9.15 hamahiga
2025
木版画
50 × 70 cm



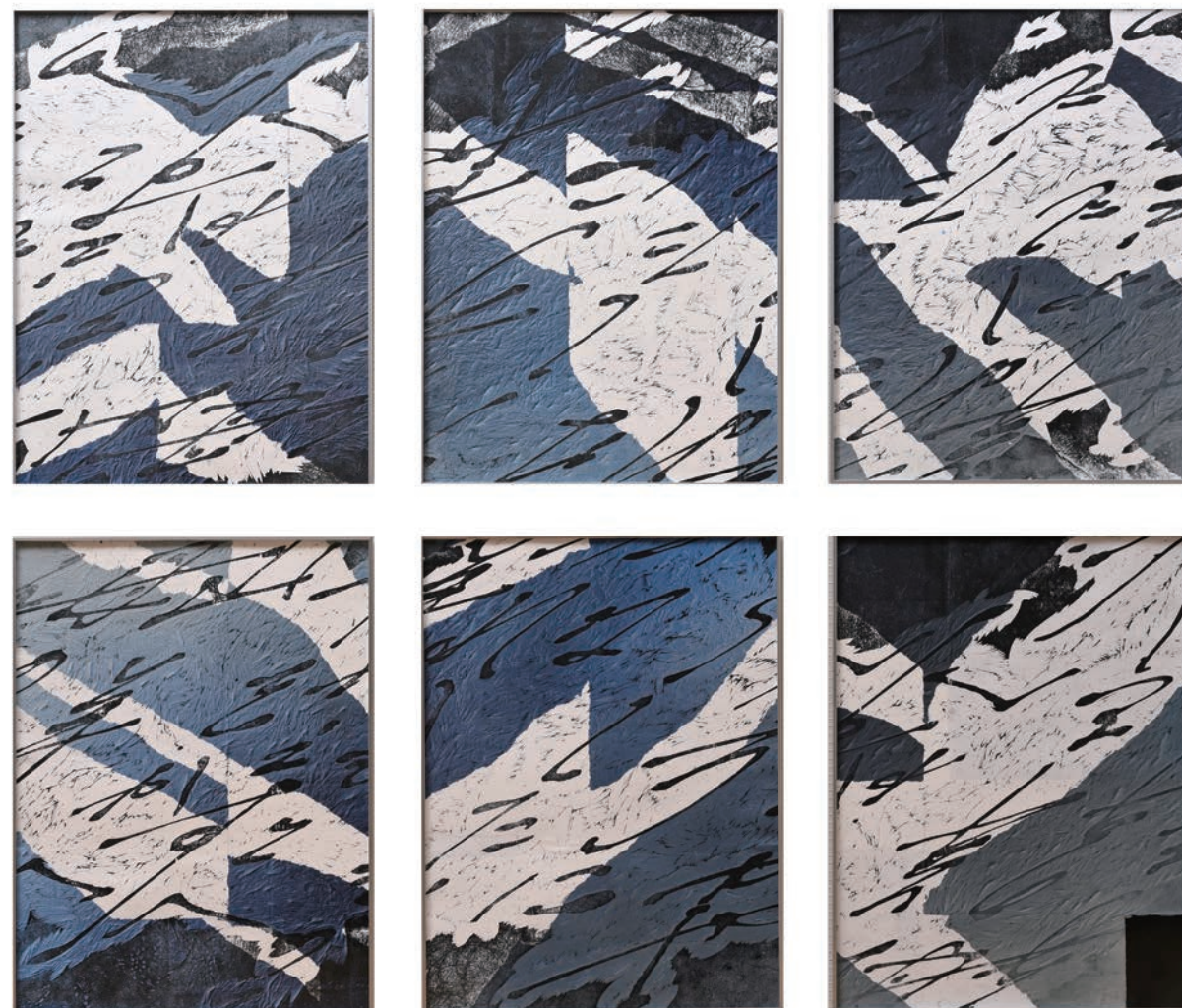
山口 茉莉 / YAMAGUCHI Mari
軌道 / We are in orbit
2025
リトグラフ
70 × 70 cm



鷺野 佐知子 / WASHINO Sachiko
freshly.43
2020
木版画
60.5 × 91.5 cm



ワタナベ メイ / WATANABE Mei
field
2025
銅版画、シルクスクリーン
88 × 62 cm



王 木易 / WANG Muyi
Pages
2025
木版画（凸版、手漉き和紙）
72.7 × 54.5 cm 6 枚組

浅沼 香織 ASANUMA Kaori

1989 宮城県生まれ
2017 愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻油画・版画領域修了

主な作品発表
2017 「全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（優秀賞）
2018 「TRANSLATION OF 3VISIONS OF PRINTMAKING international Printmaking Exhibition of 3 Universities at Thailand and Japan」Silpakorn University、ナコンパトム タイ
2019 個展「Fresh 2019 浅沼香織展」伊勢現代美術館、三重
2023 「アッセンブリッジ・スタジオ 2023」参加
2024 「アッセンブリッジ・スタジオ 2024」参加
「近くて遠くない声」旧・名古屋税関港察、愛知

落書きや平面的なイメージに奥行きをつけ、白亜地の上にステンシルの技法を用いてラッカースプレーで描きました。誰かが描いた落書きやイメージに奥行きをつけて作品にするおせっかいをすることで、見知らぬ人の表現とアートとしての文脈理解の中にある表現との間にあるギャップが浮かび上がるのではないかと考えました。

石橋 佑一郎 ISHIBASHI Yuichiro

1986 福岡県生まれ
2010 多摩美術大学美術学部絵画学科版画専攻卒業
2012 多摩美術大学美術研究科博士前期課程絵画専攻版画研究領域修了

主な作品発表
2017 「第 23 回鹿沼市川上澄生美術館木版画大賞展」鹿沼市川上澄生美術館、栃木（準大賞）
「第 85 回版画協会展」東京都美術館、東京（準会員最優秀賞）
2018 「第 7 回山本鼎版画大賞展」上田市立美術館、長野（優秀賞）
2021 「版画の見かたー技法・表現・歴史ー」町田市立国際版画美術館、東京
個展「さよなら、昨日」アートゾーン神楽岡、京都
2023 「アワガミ国際ミニプリント展 2023」阿波和紙伝統産業会館、徳島（準大賞）
個展「somewhere, not here」EUREKA、福岡
「アートフェアアジア福岡」福岡マリンメッセ、福岡
2024 「SO GRAPHICS mix 2024」大分市立美術館、大分
2025 個展「Day dream」JINEN GALLERY、東京

記憶は目から入り頭から抜ける。
常に流れる記憶は、頭のフィルターを通過し消え去っていく。
蓄積された記憶は心象風景と呼ばれ、忘却されたものは流水のように流れ過ぎていく。
私が作品を作る行為は、フィルターを通過した風景を拾い上げるように、忘れていく風景の曖昧な記憶を画面に紡ぐ作業のように思える。

岩渕 華林 IWABUCHI Karin

1985 神奈川県生まれ
2009 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業
2011 東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修士課程修了

主な作品発表
2022 個展「Flow」ギャラリー椿、東京
2023 「Sublime Introspections featuring KARIN IWABUCHI」Dorothy Circus Gallery、ローマ、ロンドン イタリア、イギリス
2024 個展「FRAGILE」ギャラリー椿、東京
2025 「クレパス®誕生 100 周年 近代巨匠から現代作家までのクレパス画®展」日南町美術館、鳥取

本作《Orchid Children》は、心理学の比喻「タンポポの子どもとランの子ども」から着想しました。どこでも強く根づく子と、手をかければ繊細で美しい花を咲かせる子。その姿に育つことの意味を重ね、「育成」を基本理念とする上田市立美術館にふさわしいと考え出品します。

勝木 有香 KATSUKI Yuka

1996 大阪府生まれ
2019 嵯峨美術大学芸術学部造形学科版画・写真領域卒業
2021 嵯峨美術大学大学院芸術研究科造形複合分野修了

主な作品発表
2019 個展「TURN ROUND AND ROUND」Kunst arzt、京都
「第 63 回 CWAJ 現代版画展」ヒルサイドフォーラム、東京（審査員特別賞）
2020 個展「FLOW AREA」Kunst arzt、京都
「ピンボケの影像」神戸アートビレージセンター、神戸
「ウィルヘルミーの吊り板」Media shop、京都
2021 「Kyoto Art for Tomorrow 2021 京都府新鋭選抜展」京都文化博物館、京都（読売新聞社賞）
2022 個展「HOPPING STAGE」Kunst arzt、京都
「雲より外」六甲山サイレンスリゾート旧館 2 階ギャラリー A、神戸
「めくられるページ、横切るハト。」シャトー小金井、東京
2023 個展「LETTING GO OF BALLOON」CANDY BAR gallery、京都
2024 個展「SKIP AND SCENE」Kunst arzt、京都
2025 「ライフライン」茨木市福祉文化会館、大阪

赤信号を待っている時、気にも留めてなかった道中の草木をモチーフにした。風で揺れる線、無造作に生える線、フェンスに絡まる線、日に当たり伸びて歪む影の線など。主に A5 サイズの紙にペンで拾っていく。手元に収まる範囲で描いた線をシルクスクリーンで引き伸ばし、連続させ再構成することで線を引くことを再確認する。

金城 徹 KINJO Toru

1979 沖縄県生まれ
2004 沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科絵画専攻卒業
2006 沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科環境造形専攻絵画専修修了

主な作品発表
2017 「TRANSIT REPUBLIC」Arena 1 Gallery、ロサンゼルス アメリカ
個展「ありふれた日常」アートスペース羅針盤、東京
美術館開館 10 周年記念展「邂逅の海ー交差するリアリズムー」沖縄県立博物館・美術館、沖縄
2018 個展「Border」画廊沖縄、沖縄
2019 「VOCA 展 2019ー新しい平面の作家たちー」上野の森美術館、東京
「沖縄・济州作品交流展 2019」Seogwipo Art Center、西歸浦 大韓民国
2020 「"Identity XVI - My Home? -" curated by Kenichi Kondo」nichido contemporary art、東京
「沖縄アジア国際平和芸術祭 2020」那覇市民ギャラリー、沖縄
2021 「沖縄・济州・台湾和平藝術交流展」非常廟藝文空間 VT Artsalon、台北 台湾
2023 「Fe: 展」ギャラリー green & garden、京都
「結展 vol.10」ホテルアンテルーム那覇 2 階 gallery 9.5 Naha、沖縄
2024 「羅針盤セレクション展-イリュージョンとオブジェ-」アートスペース羅針盤、東京
2025 「神戸アートマルシェ」神戸メリケンパークオリエンタルホテル、兵庫
個展「あの日の線は紡いだ記憶」CLIFF GARO、沖縄

流れる空気と街並み、立ち位置と価値観、重ねていく記憶。
日常のふとした時に感じる変化や距離に興味を持ち制作しています。

大坂 秩加 OSAKA Chika

1984 東京都生まれ
2009 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2011 東京藝術大学大学院美術研究科版画修士課程修了

主な作品発表
2010 個展「シリアスとまぬけ」シロタ画廊、東京
「シュル美術賞展 2010」代官山ヒルサイドフォーラム、東京（島敦彦審査員賞）
2012 「シュル美術賞展 アーティストセレクション 2012」国立新美術館、東京
2013 個展「S の外的要素たち」GALLERY MoMo Ryogoku、東京
個展「Love Letters」MICHEKO GALERIE、ミュンヘン ドイツ
2014 「VOCA 展 2014」上野の森美術館、東京（佳作賞）
「プリントって何？-境界を超えて」市原湖畔美術館、千葉
2016 「第 2 回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2016」京都市美術館、京都
2018 個展「ささやかな今日のおわり」GALLERY MoMo Ryogoku、東京
2019 個展「LOVE LETTERS」Museum Franz Gertsch、ブルグドルフ スイス
2020 個展「背中のチャックお願い」ELSA GALLERY、台北 台湾
2022 個展「つぎはぎのうろこ」GALLERY MoMo Ryogoku、東京
2023 「夢と自然の探求者たちー19 世紀幻想版画・シュルレアリスム・現代日本の作家まで」群馬県立館林美術館、群馬
個展「Bad Dream / 嫌な夢」ELSA GALLERY、台北 台湾
2025 「International Print Triennial"Graphica Creativa"」Jyväskylä Art Museum、ユヴァスキュラ フィンランド

版画・油彩・インスタレーションを通じ、舞台美術の経験から言葉とイメージを交差させる。台詞や短文を断片として取り込み、人物や空間を群像劇のように展開。虚構に潜む日常のリアルを探り、コラージュ的に再構成する試みを続ける。

大橋 朋美 OHASHI Tomomi

1987 和歌山県生まれ
2010 日本大学芸術学部美術学科絵画コース版画専攻卒業
2012 日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程造形芸術専攻修了

主な作品発表
2017 「文化庁展覧会『Arts in Bunkacho トキメキが、爆発だ!』文化庁：旧文科省、東京
個展「大橋朋美 展」galleria grafica bis、東京
「4th DISCOVER THE ONE JAPANESE ART」ギャラリージョセフサンマルタン、フランス
2019 個展「大橋朋美 展」space K、東京
2020 「ノヴィサッドミニプリント展」セルビアノビサドラビスタギャラリー、セルビア
2021 個展「大橋朋美 展」ギャラリーなつか、東京
「on paper without borders… 7th International Artistic Forum Lublin 2021」ルブリン、ポーランド
2023 個展「OHASHI Tomomi Exhibition」ギャラリーなつか、東京
「第 90 回 記念版画展」東京都美術館、東京（準会員最優秀賞）
2024 「INTERNATIONAL BIENNIAL OF MINIATURE ART」The Modern Gallery、セルビア
「台湾国際ミニプリント版画招待展 IPCInternational Mini Print 2024」国立台湾師範大学、台湾
個展「OHASHI Tomomi Exhibition」ギャラリーなつか Cross View Arts、東京
2025 「ART@GINZA hotel style artfair」ホテルモントレ銀座、東京
「大阪国際文化芸術プロジェクト OSAKA INTERNATIONAL ART2025」大阪城ホール、大阪

版に線を刻み、刷り重ねる行為は、記憶を積み重ねて生きる人の営みと重なる。
私の作品は自身の記憶を支持体とし、版画の痕跡を通して移ろう記憶を記録へと変換する。鑑賞者との交わりを介して時間や体験を共有し、新たな景色と共有の場を生み出すことを試みている。

大森 弘之 OMORI Hiroyuki

1991 茨城県北茨城市生まれ
2014 東北芸術工科大学版画コース卒業
2016 東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻洋画研究領域修士課程修了

主な作品発表
2013 「日本版画協会展 第 81 回版画展」東京都美術館、東京 ※以降毎年出品
（第 84 回 賞候補 / 準会員推挙、第 87 回 賞候補、第 88 回 賞候補）
2015 「CWAJ 現代版画 60 周年記念大賞展」ヒルサイドフォーラム、東京（審査員特別賞 / 猿渡紀代子氏選）
2016 「中華民国第 17 回国際版画ビエンナーレ」国立台湾美術館、台湾
「版画の彩展 2015 第 40 回全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（町田市立国際版画美術館収蔵賞、2016CWAJ ヤングプリントメーカー賞 YPA 賞）
2017 「第 10 回高知国際版画トリエンナーレ」いの町紙の博物館、高知
2019 「The Fifth International Mezzotint Festival」Ekaterinburg、ロシア
2020 個展「大森弘之展」養清堂画廊、東京
個展「大森弘之展」平八郎ミュージアム、愛知
「日本現代版画アート展」セルビアノビサドラビスタギャラリー、セルビア
2021 「41st MINI PRINT INTERNATIONAL OF CADAQUES 2021」ADOGI、スペイン
2022 個展「大森弘之展」養清堂画廊、東京
2023 「第 2 1 回南島原市セミナリヨ現代版画展」南島原市ありえコレジヨホール、長崎（南島原市教育委員会賞）
個展「大森弘之展」岩笔模 MBmore、台湾
2024 「Monochrome Dialogue 菊地隆知+大森弘之」文教の杜ながい 旧丸大扇屋内、山形
2025 個展「大森弘之展」晩翠画廊、宮城

黒から白にかけての豊かな諧調の表現に特化したメゾチント（銅版画）技法を駆使し版画作品を制作しています。主に山形で出会う自然のかたちの美しさを銅版画で描いています。今回は、雪や雨など空中に舞うものをモチーフに、それらを眺めながら見てきたかたちや想いをモノクロームの世界で表現しました。

長田 奈緒 OSADA Nao

1988 生まれ
2012 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2016 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了

主な作品発表
2018 個展「息を呑むほどしばらく」Open Letter、東京
2019 「Graphica Creativa 2019 – Hereafter」Jyväskylä Art Museum、
ユヴァスキュラ フィンランド
「踏み外された版画の展覧会 vol.1」MA2 Gallery、東京
2020 「都美セレクション グループ展 2020 描かれたプール、日焼けあとがついた」
東京都美術館 ギャラリー A、東京
個展「大したことではない（なにか）」Maki Fine Arts、東京
2021 「Encounters in Parallel」ANB Tokyo、東京
「Publish or Perish」Hunt Gallery, Webster University、
ミズーリ州セントルイス アメリカ
「美術の未来」Shibuya Hikarie Contemporary Art Eye Vol.15
渋谷ヒカリエ CUBE 1,2,3、東京
2022 「メディウムとディメンション：Liminal」柿の木荘、東京
「感性の遊び場」ANB Tokyo、東京
2023 個展「目前を見回す」Maki Fine Arts、東京
2024 「メディウムとディメンション：Maze」GASBON METABOLISM、山梨
「VOCA 展 2024」上野の森美術館、東京
2025 「版画ってアートなの？」町田市立国際版画美術館、東京
「第4回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2025」京都市京セラ美術館、京都

身のまわりのありふれたものやそのありようを、版や印刷を通して別のかたちで表す作品を制作。川崎市市民ミュージアムのオンライン展覧会「長田奈緒 風景としてのスティルライフ」をQRコードよりご覧いただけます。



https://www.kawasaki-museum.jp/thirdarea/ （観覧無料・申込不要）

田代 ゆかり TASHIRO Yukari

1985 福岡県生まれ
2007 九州産業大学芸術学部美術学科絵画コース卒業
2020 福岡教育大学教育科学専攻大学院教育創造コース修了

主な作品発表
2019 「第44回全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（優秀賞）
2020 「第16回 CWAJ」（ヤング・プリントメーカー賞）
2021 「第45回全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（優秀賞、観客賞）
2024 個展「夜のおい田代ゆかり展」スペース岡の泉、長野
「第49回全国大学版画展関連企画版画表現新進作家展」サントミューゼ、長野
2025 個展「田代ゆかり展」JINEN GALLERY、東京

他者が見た風景を通して、他者の異なる一面を知りたいと考えています。誰もが見たことのある夜景が、その瞬間の感情や思い出によってどのように変わるのかに興味があります。
近年では、電車や飛行機、車の中から「共有」をテーマに夜景を制作してきました。このアプローチを通じて、様々な視点や体験を表現し、共感を引き起こす作品を目指しています。

常田 泰由 TOKIDA Yasuyoshi

1980 長野県生まれ
2004 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業
2006 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了

主な作品発表
2009 「第2回 観瀾国際版画ビエンナーレ」中国 深圳
「版画―日本の第二言語」Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej Manggha、
クラクフ ポーランド
2014 「4つの窓 長野ゆかりの版画家4人展」須坂版画美術館、長野
2015 「上諏訪中学校＋常田泰由 かたちをみつけて」諏訪市美術館、長野
2016 「Drawings」switch point、東京
2017 「Views of Contemporary Japanese Printmaking」Famagusta Gate、
ニコシア キプロス
「Poetry of place 場所の醸す詩情」The Koppel Project、ロンドン イギリス
2018 「シンビズム 信州ミュージアム・ネットワークが選んだ20人の作家たち」
諏訪市美術館、長野
2020 「YAN」Taylor Galleries、SO Fine Art Editions、ダブリン アイルランド
2022 「本と美術の展覧会 vol.4 めくる、ひろがる―武井武雄と常田泰由の本と絵と―」
太田市美術館・図書館、群馬
「touch」SANTOKO、長野
「and Books」gallery N、愛知
「Refind」Gallery 惺 SATORU、東京
2023 「五美大版画教員展 版の実験場～プリントアートの現在地～」
たましん美術館、東京
2024 「and Books」Iwao gallery、東京

版により、イメージは複数になり、繰り返しながら広がっていく。近年アートブックを制作するなかで、改めて考えるようになったことだ。版を通すことでイメージは変換される。さらに組み合わせや反復など再構成を重ねることで、新しいイメージが立ち上がってくる。その予期せぬ発見にこそ、心が強く惹きつけられる。

所 彰宏 TOKORO Akihиро

1990 福島県生まれ
2014 武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画専攻卒業
2016 武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻版画コース修了

主な作品発表
2015 「无界 2015 国際三学院版画作品展」中国版画博物館、深圳 中国
2016 「落石計画 第9期 残響Ⅲ / それぞれの視座」根室市旧落石無線送信局、北海道
「シエル美術賞展 2016」国立新美術館、東京（能勢陽子審査員賞）
2017 個展「所 彰宏 見えないことで見えること」武蔵野美術大学 gFAL、東京
「アートスタジオ五日市 版画展×あきる野石版石プロジェクト」
戸倉しろやまテラス、東京
2018 「シエル美術賞展 アーティスト・セレクション (SAS) 2018」国立新美術館、東京
2019 「月びゆ -Light Crossing Border-」網走市立美術館、北海道
2021 個展「Cut and Sew」たましん本店地域貢献スペース、東京
2022 「The Adventure of Fine Art Prints」たましん美術館、東京
「パララックス」MASATAKA CONTEMPORARY、東京
2023 「Go the long way around」PATH ARTS、東京
2024 個展「Recollections」Magpie cafe-bar、東京
2025 「dpi」GALLERY SHIMIZU、神奈川

記録写真をもとに描いた絵を版表現を用いて画面に定着し、「今」の感覚で再構成することで、時間感覚や記憶の不確実性を含んだイメージの創出を試みている。

中村 美穂 NAKAMURA Miho

1991 埼玉県生まれ
2013 女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻版画コース卒業
2015 女子美術大学大学院美術研究科美術専攻版画研究領域修了

主な作品発表
2013 「新鋭展 Part I」シロタ画廊、東京
2016 個展「中村美穂展」シロタ画廊、東京
2018 「現在への起点 女子美術大学収蔵作品を中心に」女子美術大学美術館、神奈川
2019 個展「中村美穂展」シロタ画廊、東京
2020 「女子美術大学創立120周年記念展」日本橋高島屋、東京
2022 個展「中村美穂展」シロタ画廊、東京
2023 「HANGA NEXT GENERATION 明日の星たち stage.3」日本橋高島屋、東京
2024 「雲？雲！？雲！！雲の百面相展」鹿沼市立川上澄生美術館、栃木
個展「Echo in the Memory」ギャラリーそうめい堂、東京
2025 「川上澄生生誕130年記念企画展 昭和100年 東京回顧版画展」
鹿沼市立川上澄生美術館、栃木

日常の風景を題材に水性木版画を制作しています。見過ごされがちな景色の中にある記憶や感情をすくい取り、作品として留めています。

東尾 文華 HIGASHIO Ayaka

1997 大阪府生まれ
2020 日本大学芸術学部美術学科絵画コース版画専攻卒業
2022 日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程造形芸術専攻版画分野修了
中学・高校美術非常勤講師
2023 日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程芸術専攻入学

主な作品発表
2018 「全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京、第43回～46回
（第45回 町田市立国際版画美術館賞）
2019 「第1回版画五美大ポートフォリオ版画集展」多摩美術大学アートテーク、
東京、2021年第2回
2020 《夢き心で》《罪の味》《今が人生》（日本大学芸術学部長賞）
2021 「第8回山本鼎版画大賞展」上田市立美術館、長野、2024年第9回
2022 「日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻 修了制作展」日本大学芸術学部、
東京（湯川賞）
「モレスキン アートコンペティション2021」銀座LOFT/ 名古屋LOFT/
代官山蔦屋書店、東京（最優秀賞）
「[PARK] ～創ると観るの間に生まれる何か～」小田急線新宿駅6番ホーム壁画、東京
個展「東尾文華 - 燦 -」ギャルリー東京ユマニテ bis、東京 /
ギャラリー翰林堂、大阪
2023 個展「企画 新世代への視点 2023 東尾文華展 - 爛々 -」
ギャルリー東京ユマニテ 1F、東京
「90 回版画記念展 日本版画協会」東京都現代美術館、東京（B 部門 奨励賞、
A 部門 賞候補、91 回展ギャラリー賞）
2024 「FACE 展 2024」SOMPO 美術館、東京（入選）
「第22回南島原市セミナーヨ現代版画展」南島原市ありえコレジヨホール/
雲仙ビードロ美術館 / 長崎県美術館、長崎（第3部門 準大賞 渡辺千尋賞）
個展「企画 東尾文華展 - 華榮 -」Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi、東京
「第12回 ULSAN 国際木版画フェスティバル」ULSAN 文化美術館、蔚山 韓国
「プリンティング・アートの力 大いなる『日芸版画山脈』展」
日本大学芸術学部 A&Dgallery、東京

私は、水性木版と銅版を重ね、異なる版種の質感の違いを楽しみながら、新たな表現を探ってきました。水性木版の透明感と温もりに、銅版インクの立体感が響き合うことに魅力を感じています。女性をモチーフに、憧れや共感を託し、装いや表情にこだわりつつ、小さな勇気が得られる作品になるようお願いしながら制作しています。

平野 有花 HIRANO Arika

1991 北海道生まれ
2014 東北芸術工科大学美術科版画コース卒業
2016 東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻洋画研究領域修了

主な作品発表
2015 「ビュシス - IV 萌芽する版画家たち」東京、新潟、山形、福島
※以降 2020 年以外出品
2017 「東北の蕾 ビュシスよりⅡ」養清堂画廊、東京 ※以降Ⅲ、Ⅳ、Ⅵに出品
2019 個展「平野有花 木版画展」TO OV cafe ギャラリー、北海道
2020 個展「平野有花 展」養清堂画廊、東京
「みまのめ vol.6」北海道立三岸好太郎美術館、北海道
「第4回 八色の森の美術展『かたちになる力』」池田記念美術館、新潟
「きたの六花」湯涌創作の森ギャラリー、石川
2021 「第3回 ビュシスウエスト5人展」ワイアート ギャラリー、大阪
2022 「Druckenwald」TO OV cafe ギャラリー、北海道
個展「平野有花 展」養清堂画廊、東京
2023 「North PRINT」SCARTS、北海道
「PEOPLE to PEOPLE EXHIBITION」韓国
「Letter from layer - 版からの便り -」大丸梅田 11F ART GALLERY UMEDA、大阪
「版表現新進作家展」サントミューゼ 上田市立美術館 2F プロムナード、長野

水性木版画を中心にコラグラフ技法も用いて制作しています。記憶に残る光景をもとに版を起こし、曖昧な像を確かめるように摺りを重ねます。色と手を加えるごとに、匂いや空気感までも写し出すことを目指しています。

松元 悠 MATSUMOTO Haruka

1993 京都府生まれ
2015 京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画コース卒業
2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画修了

主な作品発表
2019 個展「活蟹に蓋」三菱一号館美術館歴史資料室、東京
2022 「第3回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2022」
京都市京セラ美術館、京都
2023 個展「版画報、道が動く」越後妻有里山現代美術館 MonET、新潟
企画展「出来事との距離―描かれたニュース・戦争・日常」
町田市立国際版画美術館、東京
2024 個展「サラバ化物（憶測の追跡）」茨木市立ギャラリー、大阪
Ginza Curator’s Room #010 中村 裕太「月ニトハルル」思文閣銀座、東京
「VOCA 展」上野の森美術館、東京
2025 注目作家紹介プログラム チャンネル16「松元悠 夢」
兵庫県立美術館アトリエ1、兵庫
個展「再び浮かび上がるもの」岐阜現代美術館大地館、岐阜
「スケッチーズ | 八瀬の石黒さん家から見た世界」
京都精華大学ギャラリー Terra-S、京都

ニュースを受け取った時、私と報じられる当事者のあいだに何らかの関係性が生じたと仮定し、事件の迫体験を試みるために現場へと移動する。当事者が見ていたかもしれない風景と、マスメディアから得た素材、自身の生活における要素を継ぎ接ぎし、版画にする。本作は作者が被疑者スケッチを担当したことがきっかけで作成した。

宮本 承司 MIYAMOTO Shoji

1988 大阪府生まれ
2010 大阪芸術大学芸術学部美術学科版画コース卒業

主な作品発表
2011 「版画にこだわる VII -woodcut-」 番画廊、大阪
2014 個展「宮本承司 木版画展」アートゾーン神楽岡、京都
2019 個展「宮本承司 木版画展」ギャラリーアライ、兵庫
2022 「PAT in Kyoto 京都版画トリエンナーレ」京都市京セラ美術館、京都
2024 個展「宮本承司 木版画展」ギャラリー住吉橋、大阪

大学4年生のとき、『スイカとサンドイッチ』という作品を大学版画展に出品しました。
今回久しぶりにスイカをモチーフに大きな木版画を制作して、当時と変わらないところと、大きくは変わらないからこそ表れる違いを感じました。

本村 佳奈子 MOTOMURA Kanako

1979 千葉県生まれ
2004 沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科絵画専攻油画卒業
2006 沖縄県立芸術大学造形芸術研究科環境造形専攻絵画専修修了
2020 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻（博士前期課程）修了

主な作品発表
2005 「第11回 川上澄夫美術館木版画大賞」川上澄夫美術館、栃木（大賞）
「第4回 飛騨高山現代木版画ビエンナーレ大賞」高山市民文化センター、岐阜（大賞、第3回奨励賞）
2006 「第58回 沖展 版画部門」浦添市体育館、沖縄（沖展賞）
2007 「第4回 榎方記念版画大賞展」福光美術館、富山（優秀賞）
2010 「日本・ポーランド国際版画展」京都市立美術館別館、京都・島根県立美術館ギャラリー、島根
2013 「版と言葉展」沖縄県立芸術大学付属図書・資料室、沖縄（2014、2019、2022年）
2015 「第4回蔚山国際木版画フェスティバル」蔚山文化芸術会館、韓国
2016 「未来への視座 VF16」ギャラリーTEN、東京（2006-2012,2014-2023年）
2018 「第86回版画展」東京都美術館、東京（賞候補・準会員推挙）（2019.2020.2021.2022.2023.2024年）
2020 個展「本村佳奈子展」表参道画廊、東京
2022 「九州沖縄版画プロジェクト」九州産業大学美術館、福岡（2023、2024年）
「サラエボ・ファインアートアカデミー50周年プログラム」サラエボ・ファインアートアカデミーギャラリー、ボスニア
「ドローイングコミュニケーション展」沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館展示室、沖縄（2023、2024、2025年）
2024 「結展 vol.11」3ta2 ギャラリー、愛媛
「第91回版画展」東京都美術館、東京（会員推挙）

彫刻刀の影りとバレンによる摺りで沖縄の御嶽に流れる空気と湿度、海面を漂う風の流れを表現しています。
沖縄には神が宿る場所が多く存在し、それらは生活の中にごく自然に存在します。沖縄の自然と信仰に敬意を持ちながら、私を感じ取った沖縄を木版画で表現しています。

山口 茉莉 YAMAGUCHI Mari

1983 愛知県生まれ
2006 女子美術大学洋画専攻版画コース卒業
2008 女子美術大学大学院版画研究領域修了

主な作品発表
2007 「第32回全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（買上賞）
2011 「The 12th Space International Print Biennial」韓国（買上賞）
個展「Stone's dreams」シロタ画廊、東京
2012 個展「Building a castle in the air」OKUDA Art & Craft、埼玉
2014 個展「山口茉莉展」SAN-AI GALLERY、東京
2016 個展「山口茉莉展 空想建築のある空間」galerie TRUM、秋田
2018 個展「山口茉莉 作品展」gallery sora、静岡
2020 個展「空想建築のある空間」岩筆模、台湾
2023 個展「山口茉莉展」BIOME kobe、神戸
個展 ITONA ギャラリー、東京
2015-2024 各年 個展 JINEN GALLERY、東京
2022、2024、2025 個展「山口茉莉展」みさき画廊、大分
2025 個展「山口茉莉 作品展」gallery sora、静岡
2018、2019、2021、2022、2024、2025 アートフェア「ART FAIR ASIA FUKUOKA」、福岡

個人的主観の数だけ無数の世界があり、自由意志で生きている様で
私たちは「自分」の境界すら曖昧な量子の粒にすぎない
この広大な宇宙に思いを馳せると自分はその一部なのだ和我に返り
自らの抗えない存在の小ささに何故か安堵します
それをひとつずつ表現することが私にとっての生であり、本作の制作に繋がっています

鷺野 佐知子 WASHINO Sachiko

1979 東京都生まれ
2006 多摩美術大学美術学部絵画学科版画専攻卒業
2008 多摩美術大学大学院博士前期課程版画領域修了

主な作品発表
2005 「第30回全国大学版画展」町田市立国際版画美術館、東京（収蔵賞）
2006 「第74回版画展」東京都美術館、東京（奨励賞）
2007 「第4回棟方志功記念版画展」福光美術館、富山（奨励賞）
「Thai-Japanese Graphic Art Exhibition」タイ PSG アートギャラリー、タイ
個展「鷺野佐知子展」シロタ画廊、東京（2008、2014、2018、2022）
2014 「第12 浜松市美術館版画大賞展」浜松市美術館、静岡（奨励賞）
「第82回版画展」東京都美術館、東京（準会員佳作賞）
2017 「第23回川上澄生美術館木版画大賞展」鹿沼市立川上澄生美術館、栃木（川上澄生特別賞）
2020 「HANGA NEXT GENERATION stage.2」日本橋高島屋、東京

植物には個性がある。意志を持つかのように、太陽の光、水量、気温など、周りの環境によってかたちを自由に変化させる。生きるために力強く、不器用にも感じる素直な姿に惹かれる。いまの自分からみた生きる力と愛らしい植物のそれぞれ違う魅力や面白さを、木版で対話しながら表現を続けていきたい。

ワタナベ メイ WATANABE Mei

1989 新潟県生まれ
2023 長岡造形大学大学院造形研究科造形専攻修士課程修了
現在 長岡造形大学大学院造形研究科造形専攻博士（後期）課程在籍

主な作品発表
2010 「NIIGATA オフィスアートストリート」新潟市砦谷小路周辺、新潟（商工会議所特別賞）
2011 「弥彦野外アート展」弥彦文化会館、新潟
2012 「大地の芸術祭越後妻有 冬・雪アートプロジェクト」まつだい農舞台周辺、新潟
2018 「VOCA 展 現代美術の展望－新しい平面の作家たち」上野の森美術館、東京
2019 個展「かおをつくる」羊画廊、新潟
2020 「美術にみる 型とシンボル展」北区郷土博物館、新潟
2021 個展「Object」maison de たびのそら屋、新潟
2024 個展「Someone」Gallery :b、ソウル、韓国
「第9回山本鼎版画大賞展」上田市立美術館、長野
「第49回 全国大学版画展」上田市立美術館、長野（優秀賞）
2025 「第23回南島原市セミナーヨ現代版画展」南島原市ありえコレジヨホール、長崎
個展「playroom」Gallery Ami-Kanoko、大阪

主に3DCGを用いて作成した仮想の身体像とその空間を題材に、版画やミクストメディア作品を制作。仮想の身体像と空間がもつ可変性や多層性を軸に、リアルとバーチャル、物質と非物質、見る／見られる関係の表現を探究している。

王 木易 WANG Muyi

1989 中国、江蘇省生まれ
2013 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2016 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻版画領域修士課程修了
2020 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻版画領域博士後期課程修了

主な作品発表
2017 「芸術的紐帯 寧波中日現代芸術家交流展」寧波美術館、寧波 中国
「2074、夢の世界」東京藝術大学大学美術館、東京
2018 「ビーナスを綴じる―Venus Bound」アートコンプレックスセンター、東京
「真夏の版画展」Gallery Kingyo、東京
2019 「Publish or Perish!」Museum Jyväskylä、ユヴァスキュラ フィンランド
「第23回 上海芸術博覧会―上海芸博会青年推薦展―」上海世貿商城、上海 中国
「AIR MAIL」Small works by ten artist Curated by Rechard Gorman 柳沢画廊、埼玉
「大学芸術博覧会」上海芸術センター、上海 中国
2021 「共生する力 2021 年 国際水性木版画招待展」南京芸術学院閩約美術館、南京 中国
2024 「NEW VINTAGE 2.0」京都高島屋 S.C.、京都
「Kyoto Art for Tomorrow 2025 ―京都府新鋭選抜展―」京都文化博物館、京都
個展「between the lines」Gallery Blue 3143、東京
2025 個展「Ikeba n/a」Gamoyon Gallery、大阪
「レガシー・プリントアーカイブ展」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都

書と画の境界、字と図の差異、そんなことを長らく考えて制作してきた。そして版を介した表現とは、像と痕跡のあいだにとどまる行為であると考えている。彫刻刀がなぞる線は、描写と筆記を区別しない。パルプは版の上で紙として乾き、傷のようなエンボスを定着させる。意味を脱ぎ捨てた線が、一度だけ、裂け目として現れる。



版画学会
沿革
1974—2025

版画学会 沿革 1974－2025

The Japan Society of Printmaking History

大学版画研究会

1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985

- 凡例
1. 「版画学会 沿革」は、以下のとおり構成している。
a. 版画学会の成立と変遷
b. 大学版画展の発展
c. 大学版画展の発展
d. 大学版画展の発展
e. 大学版画展の発展
f. 大学版画展の発展
g. 大学版画展の発展
h. 大学版画展の発展
i. 大学版画展の発展
j. 大学版画展の発展
k. 大学版画展の発展
l. 大学版画展の発展
m. 大学版画展の発展
n. 大学版画展の発展
o. 大学版画展の発展
p. 大学版画展の発展
q. 大学版画展の発展
r. 大学版画展の発展
s. 大学版画展の発展
t. 大学版画展の発展
u. 大学版画展の発展
v. 大学版画展の発展
w. 大学版画展の発展
x. 大学版画展の発展
y. 大学版画展の発展
z. 大学版画展の発展

大坂フォルム画廊(東京) 10月11日～16日	大坂フォルム画廊(東京) 8月21日～27日	大坂フォルム画廊(東京) 8月	大坂フォルム画廊(東京) 7月30日～8月11日	大坂フォルム画廊(東京) 7月28日～8月9日	大坂フォルム画廊(東京) 8月3日～8月14日	大坂フォルム画廊(東京) 7月	丸の内画廊(東京) 7月25日～8月6日 (A・Bの2部制で開催)	丸の内画廊(東京) 8月27日～9月8日 (A・Bの2部制で開催)	丸の内画廊(東京) 9月2日～9月14日 (A・Bの2部制で開催)
参加校 18校 出品作品 83点 買い上げ費 30点* *版画保存会からの依頼 (版画保存会が出品しているもの不明)	参加校 24校 出品作品 99点 買い上げ費 30点*	参加校 21校 賛助出品 3校 出品作品 92点 買い上げ費 30点*	参加校 29校 出品作品 117点 買い上げ費 70点* (4巻 各3点、29巻 各2点) *版画保存会からの依頼	参加校 29校 出品作品 114点 買い上げ費 64点 (32巻 各2点)	参加校 34校 出品作品 126点 買い上げ費 80点 (40巻 各2点)	参加校 34校 出品作品 114点 買い上げ費 60点	参加校 32校 出品作品 89点 買い上げ費 31点	参加校 39校 出品作品 123点 買い上げ費 44点 (22巻 各2点)	参加校 43校 出品作品 127点 買い上げ費 68点 (34巻 各2点)
会員(指導教員) 37名 会員(版画関係者) 2名	会員(教員) 51名(26校) 一般会員 2名 賛助会員 30社	会員(教員) 57名(34校) 一般会員 6名 賛助会員 31社	会員(教員) 82名(41校) 一般会員 7名 賛助会員 30社 (7月時点)	会員(教員) 82名(41校) 一般会員 9名 賛助会員 30社 (7月時点)	名誉会員 9名 会員(教員) 93名(48校) 一般会員 9名 賛助会員 30社	名誉会員 10名 会員(教員) 102名(52校) 一般会員 10名 賛助会員 29社	名誉会員 9名* 会員(教員) 108名(53校) 一般会員 9名 賛助会員 29社	名誉会員 9名 会員(教員) 120名(58校) 一般会員 13名 賛助会員 27社	名誉会員 10名 会員(教員) 122名(62校) 一般会員 17名 賛助会員 27社

10月
第1回大学版画展「76—美術大学版画展」



大学版画展は学生主体で運営する展覧会として発足した。
主旨は各大学での版画教育の成果を学生及び社会に広くみせることとした。

8月
第2回大学版画展の会期中に学生主催の交歓会を開催。
(後にレセプションとなる)

7月
カリキュラム分科会
〈座談学会誌告・カリキュラム実施の具体例・カリキュラム・卒業生アンケート〉

版画が大学の教育体制の中での存在を確かなものにするには、版画メディアが内包する問題を認識する(見つめ直す)こと。大学の美術教育は油絵・日本画・彫刻・デザイン(工業)といった分野で確立されており、それに版画が新たに加わる形が多くみられること。

既存の分野でも70年代の学生運動以降に新たな動きが加速しており、版画は美術の捉え直しの面でも重要な役割を 果せることを指摘している。

版画の問題とされる複数性と印刷媒体としての性質(大衆性・量産性)、間接的表現と技術偏重(技術重視)をどう捉えるか、「描く」から「造る(造形)」ことへの意識の転換、近在のメディアとの複合が可能などをも具体的にカリキュラムに落とし込むことで、版画特有の表現「版表現」は版画だけのものではなく、美術の表現全体にも影響をあたえることなどが上げられた。その上で、美術大学はもとより一般大学の教育系学部、短期大学や専門学校での版画教育に資するカリキュラム私案を作成した。

10月25日
東京藝術大学にて大学版画研究会主催講演会(版画家における防災と健康管理)を開催。(労働産業安全研究所 研究員 田島孝幸氏)

8月
第1回大学版画国際交流展を第6回大学版画展と同時に開催。(丸の内画廊)
フランス国立美術学校、銅版画・石版画54点。
中国、北京中央美術学院・浙江美術学院・広州美術学院・西安美术学院・四川美术学院・瀋陽魯迅美术学院・天津美术学院から550点出品。

9月10日～27日
常葉短期大学附属常葉美術館にて「全国美術大学版画展」を開催。
(買い上げ作品に数8第1回・第3回・第5回までの交通)

7月
第2回大学国際交流展を大学版画展と同時に開催。
アメリカ・タイラー美術学校(19点)、大韓民国・弘益大学(3点)が参加。



7月
東京近郊の大学8校の版画指導者が集まり第1回目の会合がもたれ、[版画科設置促進協議会]が発足した。

11月
第3回会合において正式な名称を【大学版画研究会】に決定し、会長 駒井哲郎、事務局長 吹田文明とし、1974年11月3日を会の発足日とした。

12月
第4回会合で、下記のとおり【大学版画研究会】で具体的に取り組む内容を決定。
1) 各美大における版画の現状(指導の実態と指導形態および設備と教員数など)と海外美術大学での版画の現状を調査する。
2) 版画科設置時のカリキュラムを作成する。
3) 版画科設置のための旨意書の作成をする。
4) 会則を作成する。
5) 小学・中学校の指導要領にある版画について研究調査をおこない討議する事 等

- 10月
- 大学版画研究会の目的を、「日本の美術大学に版画教育の進歩発展をはかる」として、教育体制の中に版画科を設置することが目標として掲げられた。
 - 会の目的に沿って、全国各大学の美術における版画教育の実態を把握し、版画の現状認識と版画教育のあり方、カリキュラムの検討などの研究を進めることとした。
 - カリキュラム検討グループ(後にカリキュラム検討委員会)が「カリキュラム私案」を作成する。
 - 大学版画研究会会則を決定。

8月
第1代会長 駒井哲郎の逝去にともない、吹田文明が第2代会長を務める。

8月
会長 吹田氏より発足当初の目標であった「大学に版画科を設置する」から「学術的な活動」へと変更することが提起された。

理由は、各大学で版画科の設置が進まないこと、設置したときの教育体制(自専攻学生の教育と他専攻学生への版画授業の提供)に問題が多い状況が上げられた。大学における版画教育も、学部にも版画コースが設けられることも多くなり、教員の専任での任用が増えてきたことがある。

それにとともに【研究会】から【学会】へと名称変更する案が出され(学会の定義)の報告があった。

12月
・正式な英文名称を決定。
【The Committee of Universities of Art for Print Studies in Japan(C.U.A.P.)】

5月
会長 吹田氏より研究会の名称変更の発議。
【研究会】から【学会】に変更することで地方の会員の総会および各会議への参加に便宜がはかれ、研究業績としても認められる。

12月
・国際交流委員会発足。有地好登、田村文雄、中林忠良、馬場橋勇を承認。
運営委員＝有地好登、稲田年行、小作青史、田村文雄、中林忠良、馬場橋勇、野田哲也、原 健、吹田文明
事務局＝清水昭八、池田良二、若月公平



第1回



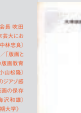
第2回



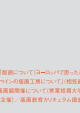
第3回



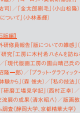
第4回



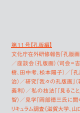
第5回



第6回



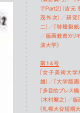
第7回



第8回



第9回



第10回

第11回 大学版画展	丸の内画廊（東京） 7月21日～8月2日（A・Bの2部制で開催）		第12回 大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月12日～12月26日		第13回 大学版画展*	町田市立国際版画美術館 12月16日～12月25日		第14回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 不明		第15回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月9日～12月24日		第16回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月7日～12月23日		第17回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 不明		第18回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 不明		第19回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月3日～12月18日		第20回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月2日～12月17日		第21回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月7日～12月23日		第22回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月6日～12月23日		第23回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月5日～12月23日		第24回 全国大学版画展	町田市立国際版画美術館 12月4日～12月23日																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	参加校 出品作品 買い上げ賞 (31名 各2点)	41校 127点 62点		参加校 出品作品 買い上げ賞	45校 327点 49点		参加校 出品作品 買い上げ賞	39校 208点 39点		参加校 出品作品 買い上げ賞	不明 不明 30点		参加校 出品作品 買い上げ賞	不明 不明 30点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 29点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 34点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点		参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点	参加校 出品作品 買い上げ賞 観客賞	不明 不明 31点

12月
・第12回大学版画展より、当年4月に開館した町田市立国際版画美術館に移行し開催。[\[以後45回展まで開催\]](#)



- ・本年度より町田国際版画美術館に本展優秀作品「買い上げ賞」受賞作品が収蔵される。
 - ・講堂でレセプションを催す。公開講座で技法研究発表、公開討論会。
 - ・国際交流として韓国弘益大学校30点出品。
 - ・公開討論会「現代の版画とは」を開催。
- パネリスト＝野田哲也、吉田穂高、国山晴巳、河野 実、石田民己

12月
「大学版画展」から「全国大学版画展」に名称を変更。[（第14回展～）](#)



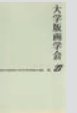
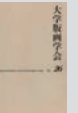
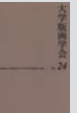
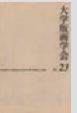
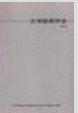
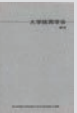
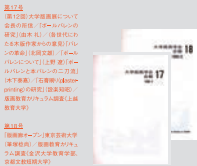
12月
第18回大学版画展より一般入場者の投票による「観客賞」を新設。
「チャリティー即売会」を美術館1階ロビーにて開催。[\[以後毎年開催\]](#)



7月
・【大学版画研究会】から【大学版画学会】に変更。

12月14日
正式名称を決定。
【大学版画学会 (The Committee of Universities of Art for Print Studies in Japan)】

- 12月
・大学版画学会研究論文の寄稿に関する規程を定める。
- ・学会誌（第20号）を発行するにあたり、新日本造形株式会社より特別な支援を戴く。



[illegible]

第38回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月7日～12月23日 参加校 53校 出品作品 254点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 30名 観客賞 学生作品販売 2452点	第39回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月6日～12月21日 参加校 51校 出品作品 250点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 31名 観客賞 学生作品販売 不明 名誉会員 9名 会員(教員) 212名 個人会員 66名 賛助会員 21社 加入校 93校	第40回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月5日～12月20日 参加校 49校 出品作品 243点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 31名 観客賞 学生作品販売 1711点(33校、310名)	第41回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月3日～12月18日 参加校 47校 出品作品 228点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 34名 観客賞 学生作品販売 1531点(34校、267名)	第42回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月2日～12月17日 参加校 47校 出品作品 228点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 34名 観客賞 学生作品販売 1429点(32校、293名)	第43回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月1日～12月16日 参加校 48校 出品作品 290点 町田市立国際版画美術館収蔵賞 31名* 観客賞 *美術館の判断で作品の形状、サイズなどを理由に9名は収蔵対象外。 学生作品販売 不明	第44回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月7日～12月22日 参加校 47校 出品作品 225点 優秀賞 34名 町田市立国際版画美術館賞 9名 観客賞 学生作品販売 不明 名誉会員 23名 会員 352名 賛助会員 12名 加入校 52校	第45回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館 12月5日～12月20日 参加校 43校 出品作品 98点 優秀賞 18名 町田市立国際版画美術館賞 7名 観客賞 学生作品販売 なし 会員(総数) 383名	第46回全国大学版画展 上田市立美術館 12月4日～12月19日 参加校 40校 出品作品 175点 優秀賞 27名 町田市立国際版画美術館賞 8名 観客賞 学生作品販売 2校 (愛知県立芸術大学・女子美術大学)	第47回全国大学版画展 上田市立美術館 11月19日～12月4日 参加校 40校 出品作品 175点 優秀賞 25名 町田市立国際版画美術館賞 9名 上田市立美術館賞 観客賞 学生作品販売 不明 会員(総数) 375名	第48回全国大学版画展 上田市立美術館 12月2日～12月24日 参加校 40校 出品作品 174点 優秀賞 25名 町田市立国際版画美術館賞 8名 町田市立国際版画美術館賞 国立印刷局理事長賞 観客賞 学生作品販売 243点(29校243名)	第49回全国大学版画展 上田市立美術館 11月30日～12月22日 参加校 40校 出品作品 174点 優秀賞 24名 町田市立国際版画美術館賞 9名 上田市立美術館賞 国立印刷局理事長賞 鹿沼市立川上澄生美術館賞 観客賞 学生作品販売 254点(29校254名)	第50回全国大学版画展 上田市立美術館 11月29日～2026年1月12日 参加校 26校(予定) 出品作品 174点(予定) 優秀賞 町田市立国際版画美術館賞 上田市立美術館賞 国立印刷局理事長賞 鹿沼市立川上澄生美術館賞 観客賞 学生作品販売 実施予定 名誉会員 25名 一般会員 309名 賛助会員 13名 加入校 (6月時点)
---	---	---	---	---	---	--	--	---	---	--	---	--

12月
・全国大学版画展記念シンポジウム「大学版画展の40年、そして未来」を開催。
(町田市立国際版画美術館)
司 会＝三木哲夫
パネリスト＝池田良二、木村秀樹、小林敬生、中林忠良、吹田文明



・「全国大学版画展歴代受賞作品のデジタルアーカイブ化」事業計画案が審議事項となる。

7月
「全国大学版画展歴代受賞作品のデジタルアーカイブ化」が承認され、準備・整理作業を開始する。

12月
第42回全国大学版画展より「町田市立国際版画美術館収蔵賞」を「優秀賞」に名称変更。

12月
第44回全国大学版画展より「町田市立国際版画美術館収蔵賞」(美術館による選考)を新設。

12月
新型コロナウイルスのパンデミックにより、第45回全国大学版画展は縮小して開催。これにより総ての関連イベントが中止。
※授賞式、学生作品販売等が中止。
優秀賞の選定は「優秀賞検討部会」を設けWeb上で投票から賞の決定まで行う。

12月
名誉会員称号授与の規程を定める。(第3章 第11条①)

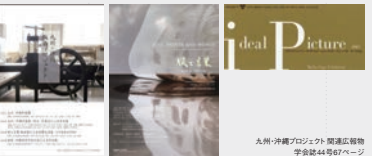
12月
・第48回全国大学版画展において初めて「特別プレス内覧会」を開催。
また本展より「国立印刷局理事長賞」を新設。
・特別展示として「国立印刷局の凹版彫刻技術の紹介」と「版表現新進作家展」を開催。
・プレイベント公開講座「新しいお札の偽造防止技術と国立印刷局の凹版彫刻技術」を開催。



⑤開方式 左から：土屋 隆一氏(上田市員)、大津 俊成氏(国立印刷局理事員)
⑥第48回全国大学版画展「特別プレス内覧会」の様子 学会誌52号65ページ

4月
【版画学会(The Japan Society of Printmaking)】がスタート。

9月
九州・沖縄版画プロジェクトを開催。(九州産業大学美術館 他) 以後毎年開催



九州・沖縄プロジェクト 関連誌掲載
学会誌44号67ページ

12月
学会誌編集体制の見直しにより学会誌出版局を設置。

7月
全国大学版画展開催の為、上田市立美術館・学会事務局・展覧会事務局の3者で実施方法を模索、検討する。
主な協議事項は下記の通り。
1) 出品点数の削減、参加校の出品者数計算式を作成
2) 「上田市立美術館賞」(美術館による選考)を新設
3) 「町田市立国際版画美術館収蔵賞」の継続
4) 出品校負担金の実施
5) 優秀賞選定は美術館会場にて投票 他

12月
町田市立国際版画美術館が改修・整備工事により休館となる為、上田市立美術館に会場を移して開催。
また本展より「上田市立美術館賞」を新設。



⑤第45回全国大学版画展「上田市立美術館賞」の授与式
⑥第45回全国大学版画展「上田市立美術館賞」の授与式

12月
第49回全国大学版画展より「鹿沼市立川上澄生美術館賞」を新設。



⑤第49回全国大学版画展「川上澄生美術館賞」の授与式
⑥第49回全国大学版画展「川上澄生美術館賞」の授与式

11月
全国大学版画展50回記念展開催。
・特別展「記念展示 現在版画の対話」併催。
・新型コロナウイルスにより中止されていた口頭発表を再開。



全国大学版画展
受賞作品
アーカイブス
1976－2025

全国大学版画展 受賞作品アーカイブについて
中村 桂子（東北芸術工科大学）

1976 年の第 1 回「大学版画展」より昨年 2024 年の第 49 回展
まで、版画学会員の投票によって選出されてきた受賞作品は
1470 点ほどとなりました。そのうち第 43 回展までのほぼ全作
品と第 44 回以降の「町田市立国際版画美術館賞」受賞作品は、
町田市立国際版画美術館（東京）に収蔵されています。膨大な
作品群を見渡せば、未熟さのある学生作品といえども、否未熟
だからこそ、そこからは個人の表現のみならず時代ごとの社会
背景、エネルギーや気分までもが生々しく反映され、1970 年
代以降の或る切り口を持った現代の姿が浮かび上がってきます。

版画学会では、現在進行形の版画表現であり時代の記録でもあ
るそれらをデジタルアーカイブし、教育機関の視点からである
特徴も踏まえ、さまざまな研究の基礎データ資料として保存し
活用されることを目的に、2015 年にデジタルアーカイブ事業
を立ち上げました。専門委員会での計画立案と運営委員会・総
会での協議を経て、2019 年にデジタル撮影されていない第 1
～ 33 回展の受賞収蔵作品（1096 点）を町田市立国際版画
美術館にて撮影、その後画像データと当時の目録や必要に応
じて実作との照合・紐付け作業を行いました。コロナ禍による
中断を経て第 34 回展以降のデジタルデータとの統合作業も進
め、今回の第 50 回記念全国大学版画展・記念展示でのスライ
ドショー形式の画像データ公開へと繋げました。

実作と当時の目録記載内容との差異、作者・タイトルの不明な
ものや受賞者が不明なものなど、データ構築の課題はまだ残さ
れており、今後も収蔵先である町田市立国際版画美術館と連携
しながら、精度を高める掘り起こし作業の継続と、公開利用に
向けての整備を地道に行う所存です。

お気付きの点があれば、下記版画学会事務局までご連絡いただ
ければ幸いです。

版画学会事務局連絡先：cuapsjoffice@gmail.com



2015 年以降、本事業にご協力くださった皆さまに深く感謝申
し上げます。（敬称略）

アーカイブ事業構築：高木幸枝、田島直樹、蜂谷充志、中村桂子

□第 1 ～第 33 回受賞作品撮影

撮影：草薨裕

撮影計画／撮影立ち会い：若月公平、生嶋順理、佐竹宏樹、
高浜利也、阿部大介、中村桂子

撮影補助:相馬祐子、田中茜、土屋未沙、姫田真梨子、古木宏美、
峰山花、森山花

作品データ作成：高木幸枝、中村桂子、相馬祐子、田中茜、
土屋未沙、姫田真梨子、峰山花

□第 34 ～第 49 回受賞作品撮影

撮影／川上弘美、草薨裕、中沢勲、齊梧伸一郎

□第 1 ～第 49 回受賞作品データ作成

デジタルデータ作成：蜂谷充志、谷口真嗣、常葉大学造形学部

蜂谷研究室／宇佐美彩乃(4 年)・曾根瑞紀(4 年)・鳥潟咲月(4 年)

デジタルデータ編集：柏木優希

全国大学版画展 歴代受賞者一覧 1 回(1976 年) - 10 回(1985 年)

※ 50 音順

1 回(1976 年)

岩本拓郎 宇都啓 岡田行夫 岡本道治 金子悦子 栗田政裕 黒田茂樹 小西康二 小沼隆一郎
佐々木善一 佐々木敏之 杉浦安史 関志づ代 高木真知子 高瀬元彦 竹内正幸 中沢真子 浜口行雄
松島順子 丸山浩司 水内君枝 山本容子 米沢富哉 若生秀二

2 回(1977 年)

朝比奈逸人 石渡尚子 伊藤馨 岩井康頼 岩田真 梅津裕司 大野春雄 鹿取武史 川部伸一 木原いづみ
草間俊行 窪川原啓子 後藤徹 後藤秀明 佐藤駒夫 末永弘子 高垣秀光 高山幹江 竹内正幸
富永多美子 中沢真子 長谷川光輝 浜口茂樹 平塚雄二 藤岡慎治 榊野道代 山本容子 米沢富哉
若生秀二 渡辺晴雄

3 回(1978 年)

阿久津紀子 梅沢和雄 大庭明子 加藤広志 河辺裕美 岸中延年 河野考博 小沼隆一郎 佐藤逸平
佐藤弘之 白石みどり 末永弘子 高垣秀光 高原斉 田畑寿美子 出原 司 鳥井雅子 西山正彦
野沢二郎 浜田和宏 伴野孝 堀田佳則 本間淳子 丸山浩司 宮山広明 モヤ・ブライ 山川達也
山口純寛 吉村芳生

4 回(1979 年)

浦江妙子 佐藤逸平 塩見奈々 中沢伸江 永津禎三 藤井敬子 松永ゆかり 三木淳史 三塩英春

5 回(1980 年)

赤塚祐二 池垣禎彦 今田恵 植木敦子 及川真介 片山雅史 河崎ひろみ 小竹文枝 後藤通之 小林大
佐野洋司 篠原美智恵 四宮修 菅野利之 鈴木共世 瀬戸典彦 竹本まゆみ 津川美哉 時田世寸子
長田睦洋 西山杏弧 樋口裕子 平田友子 藤井敬子 筆塚稔尚 保科豊己 松居良美 松村しげる
三木淳史 水谷昇雅 山口純寛 若月公平 脇川司

6 回(1981 年)

相田恵美子 池垣タダヒコ 石倉恭子 落合俊文 片山雅史 加藤美和子 木村繁之 隈部滋子 黒田季満野
小関昭彦 後藤通之 今野弘子 笹沼真人 椎名涼子 四宮修 静屋智 関口隆幸 高橋浩之 津川美哉
寺内太郎 中沢伸江 中代やよい 長田真理 鳴瀬容子 浜田弘明 林慎二 樋口満澄 樋口裕子
古川流雄 古川仁史 古本元治 堀田千鶴 真玉光郎 松尾靖史 三塩英春 宮崎光弘 山中清 山中猛史
吉田亜世美 吉原英里

7 回(1982 年)

井口寿乃 石倉きょう子 今野弘子 植木敦子 上田靖之 内山裕子 大房真一 大山幸子 岡西栄
片山雅史 鎌川裕子 金光広 古関昭彦 渋谷和良 島田美智子 玉川研治 鳥居禎子 西村正幸 樋口裕子
平木美鶴 筆塚稔尚 松下悟 松原昭俊 藪内早人

8 回(1983 年)

相田恵美子 植野英夫 内村純子 大町享 大山幸子 片山雅史 鎌田俊子 小松義明 坂根美保
荘司邦幸 豊泉朝子 西川洋一郎 林奈々子 古庄健太 松野登美子 丸山由珠 柳瀬理恵子 山本早苗
吉倉ますみ

9 回(1984 年)

荒木新子 生嶋順理 稲垣敦雄 奥秋智彦 小澤摩純 角田元美 黒木重雄 胡子修司 塩田祐一
渋谷慎治 高桐雅代 滝沢恭司 竹中彩 豊泉朝子 長島充 西川洋一郎 野々村健三 林孝彦
古本元治 柳瀬理恵子 山口真祐 吉田文江

10 回(1985 年)

稲垣敦雄 井上厚 今野詩織 遠藤竜太 太田元弘 鎌田俊子 木戸英行 木下恵介 倉地ヒサシ
黒木重雄 慶本佐知子 弦巻浩子 近藤憲昭 定信有紀 三渡基久男 鈴木広隆 関淳一 武田尚美
爲金義勝 寺島拓望 長尾浩幸 新田あけみ 林努 日高貴寿 平栗洋三 藤浪理恵子 細井克郎
本田英明 増田史朗 松石幸子 元橋寛 柳瀬理恵子 吉岡里実 李仁鉉

全国大学版画展 歴代受賞者一覧 11回(1986年) - 20回(1995年)

※ 50 音順

11回(1986年)

五十嵐英之　小野芳浩　菊池栄二　北原和典　倉地久　栗本佳典　軽米貞夫　三渡基久男　島谷誠　関口聖火子
宗知代子　滝沢恭司　田中千雅子　田宮わ子　土谷賢司　富永佳秀　縄田也千　長谷川睦　廣田由佳里　藤井新一
八木なざさ　ヤナウィッタヤ・クンチャエトーン　山口雅英　山元巖　芳野太一

12回(1987年)

青木まさみ　安藤通子　石田民巳　石綿薫　岩切裕子　馬渡響子　小江和樹　遅沢恵美子　笠原誠司　蔵本秀彦
栗原祥子　小山栄　今野弘子　笹田未人　清水美三子　志村深幸　白石千寿子　高濱利也　田中千雅子　中込洋子
橋本一哉　早野好孝　藤井美佳　古谷博子　増原アン　ヤナウィッタヤ・クンチャエトーン　宮本昌恵　村松直之
森憲也　山口雅英　襄佐知子

13回(1988年)

青野文昭　浅野佳代　安藤真司　井内美佐子　猪狩洋子　石田民己　井関洋　井出創太郎　岩津博文　馬渡響子
大場純子　岡本博志　尾関典子　金田里枝子　楠部工　蔵本秀彦　呉二良　小島伸吾　佐藤恵子　柴田寿光
鈴木頼子　鈴木玲子　瀬尾かおり　高濱利也　滝沢理子　ドリーン・ナルト　飛永圭介　波岸康幸　丹羽誠次郎
平井素子　平山祐二　深谷玲子　藤井美佳　藤田雅子　堀口葉子　松丸英生　宮井里夏　吉田茂規　渡辺信好

14回(1989年)

青木聖吾　アン・ミクミラン　井潟時人　石川智子　井出創太郎　伊藤理絵　尾崎直子　尾関典子　陰山信彦
片山雅美　楠本英治　斎藤勝也　斉藤水和田子　笹井祐子　白須純　杉田徹　須田真弘　滝沢理子　竹之内光男　中村桂子
中山理香子　西川肇一　野名志摩　馬場由起子　平山祐二　森下玄　山崎弘子　山本麻友香　李眠　鍾大富

15回(1990年)

石山直司　磯崎健一　市川佳孝　井出創太郎　伊藤理恵　今崎歩　小原由嗣　加藤英雄　川井裕史　ケイラフ・ラウン
甲木秀弘　小西吾郎　坂本三千男　笹井祐子　瀬尾正子　谷真貴子　西村知恵　野澤奈穂子　兵頭浩章　平井素子
布施典子　星博人　森本玄　山口和彦　横田亜弓　吉田美佳　李起宰　若林えり　三井田盛一郎　李誠九

16回(1991年)

石山直司　井出創太郎　井原佳織　内山江里子　太田隆明　大塚康子　岡本仁美　岡本ゆう子　小原由嗣　兼古昭彦
狩野信喜　鴨川志野　熊谷誠　甲木秀弘　謝麗絹　高崎賀朗　高橋雅子　宝珠光雲　玉村幸子　中東剛　出久根育
中原直人　ニバン・オランニウェス　箱森夏子　橋爪玲子　長谷部統子　浜田結子　福元清志　真鍋栄一　山口和彦
山田春美　山田道夫

17回(1992年)

青木広美　秋田朋子　市川佳孝　太田真理子　加藤晶　金　兼古昭彦　鴨川志野　カンタシャワナ・ウィモンマーン
国井美和　小板橋波奈子　小山敦子　坂本恭子　菅定　菅野まり子　杉田尚美　鈴木秀治　全慶　高井美佳　高崎賀朗
高橋健二　富永由美子　内藤絹子　永吉友紀　中山美香　西澤千晴　根岸文子　橋本淳也　馬場満　朴相沫　向山康雄
山下浩平　渡辺洋　玉掛理人

18回(1993年)

カンタシャワナ・ウィモンマーン　大迫緑　川上淳　北野裕之　君島真理子　小塚康成　斉藤香織　鈴木秀治
鈴村あゆち　関口武也　高橋文子　田中栄作　田端照美　富永由美子　中根幹雄　西沢千晴　野島愛子　萩原富美子
原田典子　平垣内清　平松舞子　プーブァパンサクン　堀由樹子　増尾厚　山崎不二夫　山本絵理子　頼富敦子
ラファエル・ナバス・エスピノサ　渡辺慶子

19回(1994年)

板橋恭子　市村美佐子　岩佐東子　大場真由美　大山薫子　岸田明子　國井美和　小泉貴子　神山昌輝　三宮一将
鈴木秀治　ステファーナ　関口武也　高室礼子　田中栄子　筒井礼歌　寺島徹　戸田恒美　富永由美子　中塚健太
中村有里　原田典子　樋口真美　廣畠裕子　本田雷太　松浦孝之　間宮有里絵　山本絵里子　横田歩　吉岡俊直　芦馬孝

20回(1995年)

石原誠　板橋恭子　大山薫子　岡本京子　小川勝巳　柏木悦子　金谷愛　川田英二　栗田乃布　榊原律子　佐竹宏樹
佐藤祐子　佐藤由美子　三宮一将　朱星泰　鈴木吐志哉　滝口志保　玉木慈子　鄭元植　中村晴子　花岡久美
原陽子　樋口真英　布施なざ　松下さやか　ミヒヤエル・シュナイダー　宮崎文子　山田泰英　横田歩　吉岡俊直
芦馬孝　WAYNE CROTHERS　渡邊洋

全国大学版画展 歴代受賞者一覧 21回(1996年) - 30回(2005年)

※ 50 音順

21回(1996年)

井上厚人　井上尚子　江上伸　大崎宣之　緒賀岳志　小川勝巳　小川淳子　各務文代　角田佳葉子　柏木悦子
神谷佳予子　佐久間敦子　佐竹邦子　三宮一将　下田嘉子　シャヒーダ・マンスール　朱星泰　徐皎延　鈴木秀治
滝口志保　田島直樹　張珂　筒井礼歌　中川久子　花岡久美　早川健彦　保坂昌子　松木太郎　松本由美　村上暁子
吉岡俊直

22回(1997年)

池田麻希江　石田祐佳　大崎宣之　大下百華　大西伸明　大野智代　緒賀岳志　小川勝巳　奥山直人　尾田美樹
川田奈々　川淵康平　草野晶子　小北麻記子　サイトウノリコ　集治千晶　鈴木理恵　千真圭　傍嶋飛龍　高橋和司
竹腰桃子　伊達みどり　張珂　辻元子　堤容子　本田将也　松本由美　山田純嗣　山田優子　吉村正美

23回(1998年)

伊藤寛幸　大崎宣之　加藤美奈子　瓦井克尚　康貞淑　小森琢己　近藤奈美　佐野広章　三溝利恵　霜山直良
鈴木理恵　鈴木良治　遠山こずえ　中田由絵　永山真策　成清美朝　能美朋子　長谷川誠　花澤真由美　濱田富貴
保科功喜　水野純子　三宅砂織　宮寺雷太　森田志帆　柳原三紀　山路絵子　山田純嗣　李順子　渡辺邦江

24回(1999年)

池田和正　伊藤あずさ　大崎宣之　笠原極　神谷節　川上健太郎　北沢貴宏　北爪潤　木村友香　扈文基　近藤英樹
斉藤里香　三溝利恵　篠佳代　但馬寛昭　中藤文彦　中村雅美　西野恵　濱田富貴　廣澤仁　福森優太　朴再英
松本泉　村野良子　望月宏美　元田久治　森有加　山本花樹　李英淑

25回(2000年)

青山博幸　足達清香　阿藤久枝　石井桜　一戸淳　井上丞児　浦辺佳奈枝　大舘則子　大野経典　海保貴子
金政宏治　木村友香　久後育大　呉允熙　小飯塚祐也　小越朋子　近藤英樹　斉藤里香　三丁宏美　重野克明
清水陽子　高橋耕平　竹島智子　富永深智　中塚政裕　永山真策　廣澤仁　福森優太　堀川絵津子　牧野浩紀
持田湖　保井延梨　安田里栄子

26回(2001年)

阿部大介　今田幸　大野経典　桂川成美　加藤貴義　河合真由子　久後育大　黒屋孝仁　小池まゆ　近藤英樹
坂井美弥子　重野克明　新海雅康　高橋耕平　谷黒佐和子　田村栄里　圓山和幸　豊泉明日香　中嶋清香　仲森仁
永山真策　根岸陽子　法澤有希　朴修希　福森優太　藤井哲　藤嶋敬子　マイケル・ポーマン　松本恭吾　三田建志
安田豊　結城泰介

27回(2002年)

阿川理恵　磯上尚江　今村洋平　上田太洋　大西瑞穂　小川典子　小栗沙弥子　小越朋子　河西美穂　柏原恵美
河合真由子　金暎秀　呉善英　小池まゆ　小泉健太郎　小高里枝子　衣川泰典　曾田清志　平良優作　堤明香
殿塚絵里子　中嶋清香　永山真策　羽田美奈　前澤妙子　前野智彦　松尾明子　李谷圭章　森田泰美　山内裕美
山下香織　李佳芬

28回(2003年)

磯上尚江　今川直子　上田太洋　宇田川愛　大浦和代　小野耕治　河合真由子　川井木綿　桑村讓　佐川由佳
志賀直美　徐賢珠　辛愛麻　鈴木海　瀬川麻衣子　高木香苗子　高嶋裕也　鷹野健　瀧将仁　田中恵美　塚原愛子
常田泰由　中田夏子　中山恵美　南敦子　本村佳奈子　森田奏美　梁川道子　吉永晴彦　渡邊加奈子

29回(2004年)

芦原渉　池田俊彦　石黒英彦　内山良子　太田敦子　辛愛麻　金城徹　熊崎阿樹子　栗田亜由美　桑村讓
小平美貴子　小山環　佐川由佳　佐藤妙子　佐藤孝子　塩川彩生　渋谷安弘　島崎有紀子　染谷悠子　鷹野健
田中恵美　常田泰由　鶴巻貴子　中西静香　馬場都紀子　福田裕子　堀藍　本田芳恵　本村佳奈子　山川雄高
渡辺政光　渡部吉之

30回(2005年)

阿部誠司　安藤咲　池田潤　石井条吏　今村綾　押切舞　木村薫　齋藤悠紀　榊原慶　佐川由佳　佐藤孝子
佐藤真衣　塩川彩生　柴田祐輔　渋谷安弘　清水太一　鈴木隆太　関口潮　高田麻起子　田中恵美　堤麻里子
常田泰由　鳥居信悟　仲田慎吾　長沼千絵　日光岳志　藤城ゆう子　堀藍　本田真弓　森川多笑　山岡夏子
鷲野佐知子

全国大学版画展 歴代受賞者一覧 31回(2006年) - 40回(2015年)

※ 50音順

31回(2006年)

鵜沢優多 遠藤美香 大山貴也 鎌田真紀 河村悠介 洪昇恵 権五信 齊藤智子 椎名麻美 柴田祐輔 渋谷安弘 清水太一 鈴木優 タイダ・ヤシャレヴィチ 高島藍 竹内佳奈 土井智美 野田仁美 長谷川文子 馬場都紀子 林智恵 平山愛里 藤永覚耶 堀藍 本田真弓 正井尊 三田真弘 山岡夏子 山口星子 芳木麻里絵

32回(2007年)

石崎未来 今村綾 上川愛 遠藤美香 太田智子 大野紅 垣内真理 鹿嶋裕一 鎌田有紀 熊谷周三 小島ふみ 小竹美雪 齋藤悠紀 榊原慶 鈴木奈々 曽我彩華 武内明子 竹内佳奈 田村真悠 中井萌 西出元 野嶋革 花田麗日 星岳大 正井尊 村岡夏子 モハマド・アニシュジャマン 門馬英美 山上晃葉 山口茉莉 山田彩加 吉井彩子 林ジンス

33回(2008年)

有泉智津子 石崎未来 今井恵 岩淵華林 遠藤美香 加藤友梨 河合洋典 菊池史子 清田摩耶 小島ふみ 小林美佐子 齊藤慶子 櫻井裕子 柴田源太 柴田美春 須藤光和 滝野晶穂 東条香澄 堂東由佳 中村遥 廣瀬理紗 福田浩子 藤崎美和 松村かおり 右田啓子 門馬英美 山田彩加 吉松遼平 李元淑 渡辺真子

34回(2009年)

赤保谷香 石崎未来 今井恵 大泉力也 大坂秩加 大畠雅人 岡田晴菜 キム・キョンソン 桐明由季 小林文香 斎藤修 酒井阿弥子 酒井妙子 酒井誠 柴田美春 関文子 泉水志織 高木麻衣 谷川直子 東条香澄 鳥谷部恵里子 西村沙由里 根岸一成 野瀬昌樹 野田仁美 林明日美 廣瀬理紗 松井亜希子 宮元承司 三好愛 吉田ゆう

35回(2010年)

あるがあく 石川真衣 泉奈々子 岩淵華林 上田裕子 奥平恵理 木曾浩太 桐月沙樹 金光男 栗棟美里 小林翼 小林美佐子 斉藤慶子 サダト・モハマッド・ラザウル 下河智美 ステファン・ラッセル 武智なつ子 直野分 田沼利規 田村智子 東条香澄 戸田ひとみ 長増恵理子 西村沙由里 廣瀬理紗 藤木祐里恵 藤崎美和 儘田侑典 宮田雪乃 安河内裕也 吉田江里

36回(2011年)

石橋佑一郎 伊藤学美 岩淵彩香 上田裕子 河股由希 倉金奈々子 黒澤優哉 小林文香 佐竹広弥 サダト・モハマッド・ラザウル 高橋邦彰 瀧千尋 瀧本友里子 竹内秀実 田中智美 茶之木絵理 遠山由恵 西平幸太 野嶋革 バレリー・ヘレン・サイボーズ 日沼亜依 藤木祐里恵 藤田典子 前橋瞳 増田奈緒 水本伸樹 本岡千尋 横内朝 栗棟美郷 中村由姫

37回(2012年)

赤本啓護 安齋歩見 伊勢村美幸 市野悠 伊藤学美 稲端渚 上田裕子 大場咲子 北村早紀 邱桂欄 斉藤思帆 鈴木富美子 武田典子 田島恵美 谷口典央 千島麻耶 鳥取花奈 長田奈緒 中村花絵 中村美穂 ニエト・カルロス・アルベルト 西村沙由里 根本佳奈 畠山美樹 平田彩乃 藤田典子 増田奈緒 三浦友里 宮田真有 横山麻衣

38回(2013年)

浅野絵理 安齋歩見 市野悠 上田裕子 大久保達郎 大場咲子 岡田育美 河西優子 栗田ふみか 才田茜衣 坂井孝祥 更級真梨子 下山早智子 杉本奈奈重 所彰宏 中村真理 ニエト・カルロス・アルベルト 西山瑠依 初田有以 平澤みどり 平野有花 藤田依理加 藤原麻子 前田愛美 増田奈緒 峰山花 宮越裕子 村上早 横内アサ 吉田悠希

39回(2014年)

秋庭麻里 色川美江 大場咲子 小黒実咲 小野修平 小野澤久美 片岡外志子 川村紗耶佳 木村祥乃 木村光里 倉金奈々子 小林あやめ 近藤沙桜里 坂井孝祥 佐藤絵里那 杉本奈奈重 鈴木智奈美 鈴木理恵 関貴子 中村花絵 中村真理 中村美穂 二井矢春菜 野崎優里 箱山朋実 波能かなみ 広畑聡美 増田早希 増田奈緒 村井都 村上早

40回(2015年)

色川美江 岩田駿一 薄井明香 大杉祥子 太田絵理 大森弘之 小黒実咲 小田千夏 岸由紀子 木下珠奈 霧生まどか 栗田ふみか 小西景子 齋藤僚太 櫻井想 佐野友音 杉本奈奈重 鈴木結紀子 関貴子 高島美幸 田中藍衣 田中西 所彰宏 箱山朋実 日高衣紅 松江仁美 松塚実佳 水野愛里 宮川千明 村上早 森茜

全国大学版画展 歴代受賞者一覧 41回(2016年) - 49回(2024年)

※ 50音順

41回(2016年)

秋庭麻里 芦川瑞季 石井理沙子 石部汐里 今江ひとみ 上森響子 大城舞華 尾形愛 岡本寛子 小野澤久美 片岡外志子 岸由紀子 櫻井想 下山明花 鈴木理恵 瀬戸口南 玉城綾乃 鶴田功生 手賀彩夏 豊川宏美 鳴輪紗也加 二井矢春菜 錦沢葉月 西村涼 萩原真未 波能かなみ 廣畑聡美 古木宏美 松元悠 守屋佑香 山田ひかる 山本まりか 吉浦真琴 呉窮

42回(2017年)

浅沼香織 芦川瑞季 石川みほ 石部汐里 今木彩瑛 上森響子 大杉祥子 太田絵理 小関綾乃 柏原文音 木村美咲 姜菲 神山寛貴 小西景子 佐藤麻依子 ジョギョウヨウ 関萌瑚 高瀬実穂子 田沼可奈子 張巧君 中里葵 西村涼 藤井志保 松江仁美 松澤綾 松元悠 三輪奈保子 MO Shunwen 諸岡亜弥 谷田川瑞生 山田ひかる 山之内葵 ロビンソン愛子 和田豊樹

43回(2018年)

雨宮ひかる 石田ちはる 上森響子 大崎緑 太田美葉 大塚美穂 片岡外志子 加納成浩 神山寛貴 漢囁 酒井建治 佐藤真奈美 島田華奈 鈴木真衣子 戴飴霏 高瀬実穂子 滝本有沙 武雄文子 富永華苗 野中みなと 原麻里奈 古木宏美 宮寺彩美 三輪奈保子 村上英里 茂木ひとみ 森茜 山田ひかる 山田真実 吉浦真琴 呉窮

44回(2019年)

秋谷菜摘 宇野慧子 落合梨乃 勝木有香 加藤みゆき 金子玲奈 加納シゲヒロ 神山寛貴 木内あかり 吉瀬さくら 小泉百合子 古賀慧道 小西佑奈 櫻井萌香 佐藤雄飛 朱夫誠 鈴木真衣子 戴飴霏 田代ゆかり 田中穂 富永華苗 長沼翔 貫涼海 パユーラタナ・パチャラパン 古屋真美 宮内柚 茂木愛子 茂木ひとみ 山口柚佳 山田溪樹 山田翔太 山田真実 六根由里香 渡邊美波

45回(2020年)

青木絵理 伊藤萌 上原あかり 宇野慧子 大山菜那 何静 金子みずき スウ・コウウン 鈴木真衣子 田代ゆかり 張犇 長沼翔 中森碧 西田麻梨果 野木海生 東尾文華 ベクト・パラ・エステファニア 森ゆい 山崎結子 山田桃子 吉松由梨亜

46回(2021年)

阿部七菜子 池田聡子 石川莉帆 磯崎海友 大久保春霞 木村風音 小野寺唯 川添彩加 ギ・イ 木村大祐 桐谷美羽 小平華純 柴田若奈 suma ソン・アリ 高橋天真音 竹谷百萌香 陳憶誠 寺師芽生 鳥越愛良 長沼翔 中森碧 野木海生 ホウ・ブンズイ 細井彩花 南澤愛美 簗田梨々花 森田理子 ユン・ドヒ 葉園飛 吉澤美樹

47回(2022年)

磯崎海友 今井歩美 今井祥子 上田小晴 上原あかり 菊野祥希 銀山めい ゴゼル・アン 小林弘実 近藤ひかり 佐藤翼 鈴木遼弥 ソ・ジオ 陳憶誠 辻彩葉 成田舞衣 野木海生 原田なごみ 堀江大晴 松尾華子 三村萌嘉 李玲瓏 劉倩 劉珍珍 わたなべ淑子

48回(2023年)

青柳有華 石川ひまり 石坂瑛未 宇野美香 ガーセミー・バルディース カク・ソヘイ 加藤凜太郎 鹿野真亜朱 萱原遊 木村風音 ゴゼル・アン 佐藤寧音 佐藤璃果 シュウ・セイイ 鈴木剛 鈴木晴絵 田中千里 チョウ・ウリン 友澤春香 中村珠莉 成田華蓮 野木海生 朴愛里 原田圭捺 藤井晴子 何佳敏 山上ゆい 山田笑歌 李佑安

49回(2024年)

青山礼 上橋明花 カ・ギョウヒョウ 加藤蘭奈 久野龍之介 久保田美菜 小林幹太 阪口恵 清水晃陽 末木香衣 民谷茜 チン・ウテン 土屋朱緒 友澤春香 鳥生理央 長沼あかり 中平果歩 中村珠莉 西田彩乃 朴愛里 原万里子 ヒョウ・イ HU RUOSHUI 細溪響季 前田菜緒 森吉由衣 吉田桃 渡邊芽衣 王子琦



「現在版画の対話」
関連イベント

特別展「記念展示 現在版画の対話」関連イベント

講演 「山本鼎の創作版画」

山極 佳子（上田市立美術館学芸員）

2025 年 12 月 20 日 14:00~15:00

於 第 50 回全国大学版画展授賞式会場（上田市立美術館）

（司会：遠藤）

ここからは第 50 回記念展の関連行事となります。進行は武蔵野美術大学の遠藤が務めますので、よろしくお願いいたします。まず記念講演として、上田市立美術館学芸員の山極佳子様に「山本鼎の創作版画」というタイトルで講演を行っていただきます。山本鼎については、学生の皆さんも名前を聞いたことがあるかと思いますが、実は私自身、教職の授業で彼のことを学びました。それほど多方面で功績のある方ですが、今回は創作版画を取り上げていただきます。それでは山極様、どうぞよろしくお願いいたします。

（山極）

はい、よろしくお願いいたします。私は上田市立美術館の学芸員をしております山極佳子と申します。本日受賞された皆様、本当におめでとうございます。着座のまま失礼いたしますが、このような大学版画展の授賞式の当日に、版画の専門家である先生方や学生の皆さんの前で講演をさせていただくことは大変恐縮に存じます。しかし、せっかく当館で大学版画展を開催しているというご縁もありますので、当館のコレクションを紹介するコーナーだと思っていたら、山本鼎のことも合わせて知っていただければと考えております。少し自身のハードルを下げてお話をさせていただきますが、50 分頃までよろしくお願いいたします。

それでは、私どもの上田市立美術館についてお話しします。先ほどから名前が挙がっております「山本鼎記念館」という施設が、かつて上田城の城跡公園内にありました。2014 年まで存在し、現在は上田市立博物館の別館となっている建物が、当館の前身である山本鼎記念館だったのです。2014 年の上田市立美術館開館に伴い、記念館の全資料が移設されました。そのため当館は、山本鼎を中心として、また石井鶴三、ハリー・K・シゲタ、林倭衛など上田にゆかりのある近現代の作品を収集・調査している美術館という形になります。また、1999 年から山本鼎の名前を冠する公募展「山本鼎版画大賞展」を開催しており、記念館で開かれていた時の事務局機能を引き継いで実施しています。そして 2021 年の第 46

回展からは、全国大学版画展も開催させていただいております。

では、山本鼎とは何者なのかという点についてですが、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、時折驚かれることがあるものの、彼は上田の出身ではなく愛知県岡崎市の出身です。明治 15 年に愛知で生まれ、11 歳の時に浜松町の木版工房に弟子入りしました。それも彫版、つまり版を彫る職人としての工房に徒弟入りしたのです。これが山本鼎の版画、ひいては美術への入り口となりました。職人としてキャリアを始めたという点が、この人の重要なポイントです。その後、やはり美術の道に進みたいという志を持ち、1902 年に東京美術学校（現在の東京藝術大学）の西洋画科に入学しました。その在学中に、有名な創作版画第 1 号と呼ばれる作品《漁夫》を発表します。このあたりについては、後ほど詳しくお話いたします。その後、1912 年に渡欧してフランスに渡り、フランス各地に取材した伸びやかな版画作品を多数発表しました。帰国後は創作版画の旗手として日本創作版画協会の会長になり、また 1931 年に日本版画協会が設立された際には副会長に就任するというのが、大まかな流れとなります。



山本鼎肖像写真

先ほど先生のお話にもありましたが、版画の話に入る前に少し美術運動の話をさせていただきます。山本鼎は何と言っても美術教育運動で有名な人物ですが、彼が上田で起こした運動は二つあります。先ほどフランスに行ったとお話しましたが、フランス留学からの帰り道、第一次世界大戦が始まったことで留学を継続できなくなり、ロシア経由で帰国するこ

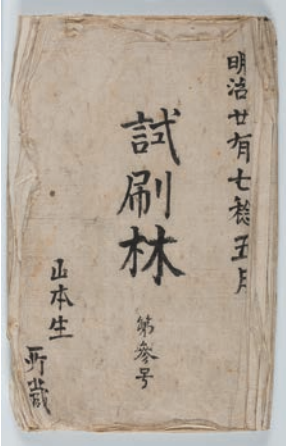
とになりました。そこで、子供たちの絵が大切に飾られているロシアの「児童創造美術展」や、民衆の作った工芸品が事業として生産・販売されている現場に出くわし、これを日本でも展開できないかと考えたことから生まれた運動です。ここで「上田」という地名が出てきます。山本鼎の父は医師でしたが、その医院があったのが信州の、現在は上田市になっている神川村という場所でした。この地で二つの運動を展開したため、上田市の近代史を語る上で山本鼎は大変重要な人物となっており、記念館まで建てられることとなりました。

この「児童自由画運動」と「農民美術運動」は、大正時代の日本における代表的な運動と言えます。児童自由画運動については、当時の小学校などの図画教育で使われていた『新定画帖』という教科書がありました。この教科書に載っているお手本を正確に書き写すことが当時の図画教育でしたが、鉛筆画や毛筆画、図形をそのまま写すような授業で成績をつけるのではなく、児童が直接対象を見て描き、そこから得た感動を表現する美術教育を行おうと言ったのが山本鼎でした。これが現在の美術教育に至るまでの影響力をもたらしたと言われています。

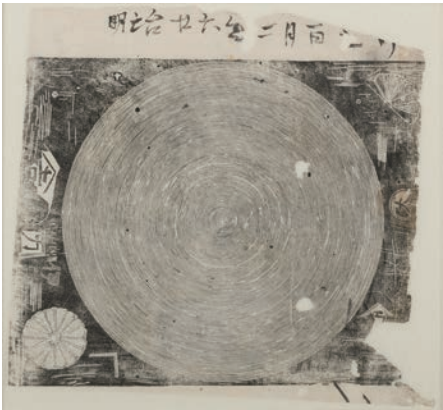
もう一つが農民美術運動です。これは冬の農閑期、作物が取れない時期に農民たちの副業として工芸品制作を奨励したものです。大正時代は都市の工業化が進み、地方からの人口流出やインフレによる米騒動など、全国的に農村問題が深刻化していました。国が農村の副業を奨励していた背景もあり、山本鼎は工芸品作りを提唱しました。それによって経済面はもちろん、心の豊かさも涵養しようというのが美術家である彼の目的で、それが全国へと広がっていったのです。こうした民衆に向けた運動であっても、彼は常に「美術」であることを意識していました。このような人物が「創作版画の父」と言われている点に、深い関連性や地続きの精神が感じられます。

では、版画のお話に移ります。先ほど申しました通り、彫版職人から創作版画運動の旗手へという歩みの中で、こちらにあるのは『試刷林（しずりん）』、つまり試し刷りのスクラップ帳のようなものです。少し見づらいですが、11 歳で弟子入りした際に習得したのは「木口木版（こぐちもくはん）」という技法でした。この会場にはご存知の方も多いと思いますが、木版は大きく「板目（いため）」と「木口（こぐち）」に分かれます。小学校などで一般的に行われているのは板目木版で、木を縦に切った面を版にするものです。一方、木口木版は木の年輪が出る切断面を用います。非常に硬いため、銅版画に使うビュランで彫ることで緻密な表現が可能になります。この『試刷林』には、人物、風景、生物、解剖図など多岐にわたる主題がスクラップされています。中の《ウズマ

キ》などは現在展示しておりますので、ぜひその線の細かさをご覧くださいと思いますが、弟子入り当初は細い線をひたすら引き続ける鍛錬から始めたようです。



《試刷林 第参考》表紙 1894(明治 27) 年



《ウズマキ（試刷林）》



《寺嶋伯肖像（試刷林）》1893(明治 26) 年

また余談ですが、この『試刷林』の中にキンビールのラベルが描かれたものがあり、このことを元に彼がロゴデザインを手がけたという説がありますが、これはどうやら異なるようです。山本鼎の長男である詩人の山本太郎氏が、新聞取材

で「あれは違います」と答えている記事があるため、おそらく違うでしょう。ただ、商標や風景など、あらゆるものを描写しなければならなかった職人としての練習帳であることは間違いありません。この木口木版が挿絵や印刷複製技術として使われていた期間は短かったようで、鼎によれば日本に入ってきたのは明治18年頃、師匠である桜井虎吉がその最初期の一人だと言っています。しかし、日露戦争後には写真版やリトグラフといった科学的版式に圧迫されていきました。木口木版が使われていた期間は、大きく見積もっても1885年から1905年であり、実際に複製挿絵として一般に使われた期間はさらに短くごくわずかだったと思われますが、その短い期間に彼がちょうど木口木版の工房に入り、後に創作版画の父となったことには大きな意味があると考えています。



《石膏デッサン》1899（明治32）年

こちらは職人時代の石膏デッサンのスケッチです。彫り方を考えながら鉛筆で線を起こし、立体感を出している様子が分かります。これも展示中ですので、ぜひご覧ください。こうした鍛錬を繰り返し、11歳で工房に入り19歳で年季が明け、報知新聞社に入社するけどすぐやめてしまって、その後東京美術学校に入学しました。西洋画科に進んだことから、職人ではなく美術の道に進みたいという意欲が見て取れますが、木版工房で培った描写力により、この時点でデッサンは非常に巧みであったと言われています。



《蚊帳》1905（明治38）年

こちらは《蚊帳（かや）》という作品で、卒業の年に描いた油絵です。当時、東京美術学校には黒田清輝がおり、その影響もあってか、女性の描き方が似ているように思います。障子や蚊帳を透かして室内に差し込む柔らかい光の中に浮かび上がる人物という、非常に難しい主題に挑んでいますね。後の油絵と比べると描き方が全く異なるため、この暗さや描き方を覚えておいていただければと思います。



《漁夫》初摺：1904（明治37）年（画像は後摺り：1988（昭和63）年）

ようやく、創作版画第1号とされる《漁夫》についてです。これを与謝野鉄幹が主催をしていた雑誌『明星』に発表しました。ここで版画仲間であった石井柏亭が、「友人山本鼎君、木口彫刻と絵画の要素をもって画家的木版を作る。刀はすなわち筆なり」といい、これが「刀画（とうが）」と呼ばれました。これが創作版画の第1号とされ、山本鼎は複製手段であった版画を芸術として切り開いた人物として知られるようになります。当館には《漁夫》の主版がありますが、以前は石井鶴三が所有していたようです。《漁夫》制作を近くで見ていた鶴三の回想によれば、鼎が版面を黒く塗り、丸刀（コマスキ）で彫っていくと、そこから光が射すように見えたといいます。また、普通板目木版でのコマスキは不要な部分を取り去るために使いますが、これを筆のように使いこなす点において、山本鼎は名人であったと回想しています。主版と色版が同じ板の表裏に彫られていて、二版だけのとてもシンプルな作品になっています。また、「漁夫」のテーマで石版画も作っていますが、漁夫の体部分のディテールが潰れてほぼ黒一色になっているのですが、なんとなくがっしりとした体格の量感が伝わる作品かと思います。

《漁夫》の後も鼎は板目木版の優品で有名になるため、「木口木版職人から脱却して板目の創作木版を作り上げるようになった」と言われることがありますが、必ずしもそうとはい切れません。鼎は木口木版を非常に大切に考えていました。先ほどの『試刷林』の裏表紙には「西洋木版」と記されています。日本式の板目木版に対し、彼は「西洋木版」としての木口木版の優位性を唱えていました。「日本木版と西洋木版というのは、前者は原画の輪郭線を残して他を削り、後者西洋木版の方は新たに線を起こして原画の濃淡を成就する」と言っています。日本木版は浮世絵みたいな線画に適していて、西洋木版は油絵とか水彩画のような輪郭線のない絵画に適しているということです。「日本木版の技術は単に原画のままの表出にとどまるが、西洋木版の方は原画紹介の他に、別に創意的な刀線彫刻の線によって技術に多様の優劣を存する」と。日本木版は工芸的で、描出される線は縁の下の力持ちみたいなものになり原画を複製するという意味では正確に描出ができるかもしれないが、西洋木版の方は「美術的な刀線の独立を持って公然活歩することができる」という様な少し大げさな言い方で優位性を唱えていました。先の《漁夫》についても、版面を黒く塗ってから彫り進める手順や、線を起こして立体を表現する手法において、木口木版的な発想に基づいた作品と捉えることができます。

そこで、この考え方は、鼎が西洋画における「トーン（色調）」について語っていることと似ています。フランスから帰国した後の作品では、異なる色調の面が重なったり連なったりすることで立体感が生まれるというトーンの考え方がより習熟されています。面の連なりで立体感や空間性を見るという点は、油絵も版画も共通しています。後半期の油絵では、筆致がそのまま面になるような大胆な筆使いで対象の量感を持たせています。以前、ある版画家の方が鼎の《トマト》を見て「版画家が描いた油絵という感じがする」とおっしゃっていましたが、まさにその特徴が表れています。



《トマト》1918（大正7）年

鼎は木口木版での制作を大切にしており、挿絵も多く残しています。北原白秋の『邪宗門』の挿絵を木口木版で担当しています。白秋は鼎の妻・家子のお兄さんで親友でもあり、鼎が児童自由画運動を展開する時に、北原白秋は児童自由詩運動を起こしています。



《鑪斧》1905（明治38）年

また、こちらは蒲原有明の詩集『春鳥集』の挿絵で、原画は青木繁が描いた水彩画ですが、それを山本鼎が木口木版にしています。この真ん中にある橘の木を、旦那さんが切り落とそうとするのを奥さんが止める、というシーンの絵で、奥さんが今までの長年の思いを吐露するドラマチックな場面です。画面の上のところに木の年輪の模様が枠の意匠として使われていますが、この部分は青木繁の原画には無く、木が切られるか切られないかという場面で橘の木を強調する遊び心として枠の意匠を加えた、ということと、もしかしたら木口木版でこの絵を描いてますよという鼎の自負やプライドのようなものも表されているのかなと考えます。

1907年になると雑誌『方寸』を、石井柏亭、森田恒友と立ち上げます。この『方寸』という雑誌は、『ユーゲント』や『ココリコ』などの海外の雑誌からの影響が強く、アルフォンス・ミュシャらが表紙を飾る美しい海外の美術雑誌への憧れが見受けられるのですが、実は、江戸時代の町衆文化への

憧れも表出されていると言われています。印刷文化がすごく隆盛だった時代への憧れですね。西洋木版をあれだけ持ち上げる鼎ですが、浮世絵に関しては、「徳川時代の浮世絵の美術価値を無視するわけにいかない」と言っています。創作版画の要件としてよく言われているのは自画・自刻・自刷（じが・じこく・じずり）、自分で描いて自分で彫って自分で刷るってことなのですけれども、浮世絵はそうではなく分業制の版画になります。しかしながら、徳川時代の美麗な浮世絵に関しては、素晴らしい日本の文化であって無視できない、と言っています。



『方寸』第1巻第1～5号 1907年

《草画舞台姿》という作品は、坂本繁二郎と一緒に東京美術倶楽部を設立して、当時芝居で有名だった役者の絵を描いて一儲けしようとしたものです。この作品では、坂本繁二郎が絵を描いて山本鼎が彫りと刷りを分担するという、分業制を行なっています。このことから、浮世絵に美術的価値を認めたように、単なる複製に墮してしまわないかという点がポイントなのであって、つまり木版の技術がちゃんと絵の中に現れているのかということが重要なのであって、すべてが自画・自刻・自刷でなければならないと言っているわけではない、ということが分かるかと思います。

そしてその後フランスに渡ります。《デッキの一隅》という作品ですが、これはフランスに渡る船の中でスケッチしたものを元に描かれた版画になります。板目木版の作品です。フランスでエコール・デ・ボザールに入学をして、油絵ではなくエッチング科に入ります。東京美術学校では西洋画科でしたけれども、西洋の画家の多くは版画も制作していたらしく、そんな木口木版やエッチングの本場で版画を学ぼうという意欲があったのかなと思います。



《デッキの一隅》1912（大正元）年

実は、鼎のフランス行きは、失恋をしてすごく落ち込んでいたのを見かねた友人たちの勧めなのです。石井鶴三、石井柏亭兄弟の妹が好きだったのですが彼女のお母さんに反対されて失恋して、すごく失意の日々を過ごしていたから、あなた一旦フランスでも行った方がいいわ、みたいな感じです。そんな失意の船内で描いたものが元で《デッキの一隅》が作られているので、嘆く女をモチーフとした本作は鼎の心情がよく表れているのではないかとされています。ですがきっと、気を取り直して版画の本場で学ぼうと頑張ったのでしょね。だと思います。

そして、こちらは《セーヌ河畔の村》という割と大きい木口木版の作品ですが、雨が降っていて風が強いある村の情景が描かれていて、暗い雲の荒れている空模様、雨が降っている様子、風に揺られる木の枝の様子が輪郭線でなくとても細かい描筆で表現されていて、とても意欲的な作品だだと思います。



《セーヌ河畔の村》1913（大正2）年

次に、《漁夫》と並ぶ作品として有名な《ブルトンヌ》という作品があります。鼎はフランスで各地に画題の取材に行ったのですが、これはブルターニュ地方の独特な衣装を身にまとった女性をスケッチし、帰国後に完成した作品になります。この作品の画稿はもう一つ名古屋市美さんが所蔵していますが、名古屋市美さんがお持ちの画稿には背景に大きく帆を張る人物が描かれています。それが次の画稿ではちょっとシンプルになって左側に岬が描かれるようになる。そして最終的に仕上がった作品では、背景には何もない海の水平線だけが見えるもっとシンプルな構成になっています。要素を減らして構図をシンプルにしているということが一つと、あと、2番目の画稿では頬がピンク色なのですが、これも排されて色版も少なくなっています。ただ、すごくシンプルなのですけども、ぜひ本物を見ていただきたいのですが、女性の顔のシワがすごく丁寧に描かれています。他はすごく平面的なのだけでも、シワであるとかそばかすであるとかの描写が、陽光の強い港町に生まれ育っている女性の表情を映しているようで、この人何を考えているのかな、どういう人なのかな、というリアルな人物像に注目できるように変化してきていることが、画稿と見比べることで分かるかと思います。是非、素敵な作品ですので実物を観ていただければと思います。



《ブルトンヌ》1920（大正9）年

こうしたフランスや、他のヨーロッパの風景に取材した作品が帰国後たくさん制作されます。この時期の作品が鼎の版画作品の最盛期と呼ばれることが多いです。渡欧前は、板目木

版の日本木版は複製的ですが、とあれほど言っていた鼎なのですが、フランスに行くと、西洋の画家がむしろ日本式の版画を珍しがって輸入しているのを面白がっている内容の手紙がありますし、ブルターニュのようなのびやかなフランスの風景は、日本と比べて湿度も低くて明るいので、渡欧すると絵がいきなり明るくなる日本の画家が多いと言われているのですが、鼎もそういう風景を描くにあたっては板目木版が最適と判断したのかもしれない。

1919年、鼎は日本創作版画協会を設立します。《高原の道》という作品は、その第1回創作版画協会展に出品した作品になります。ジंक凸版と木版での併用の作品です。1919年というのは、鼎が農民美術、自由画運動を始めた年と同じ年なのです。そのため1920年代にはいきなり鼎の版画作品は少なくなります。版画はすごく手がかかるので、30年代以降の作品でも当館では《山鳩》くらいになってしまう。油絵はまだある方なのですが、版画の作品は極端に少なくなっていってしまう。そんな中、創作版画協会の会長であるとか、その先の日本版画協会の副会長になって、版画というものの後進を支える存在になっていきます。



《高原の道》1918（大正7）年

創作版画というと木版画のイメージを持っている方が、割と多いように思っているのですが、割と多いように思っているのですが、織田一磨などは石版画をたくさん描いていて、鼎自身も様々な版種を手掛けています。大切なのは絵と版種が合っているかということ、その版種がちゃんと絵に対して生きているかどうかということが大切なのです、と鼎は言っていて、木版画だけでなくジंक凸版と木版を重ねた作品や石版を使った作品も制作していました。あと、ちょっと不思議な作品があって、みずゑに掲載されている作品ですが、技法が「半調色版」と書いてあります。鼎自らが使っている言葉なのですけども、半調色版って版画で普通あまり言わないですよね。印刷技法としては、絵の暗い部分のコントラストを弱め、ちょっと明るくするために

ドット状の色版を使い、そのドットの大きさを調整することを半調と言うらしいのですが、合っていますか？詳しい方いらっしゃったら教えていただきたいのですが、多分そのことを言っていて、当時の版画としてはあまりない作品と言えるかと思います。拡大するとこういうちょっと網目模様になっていて点々が上にうっすらとかかっています。このドット部分も黒いドットと茶色いドットがあったりします。このことから実験的にいろんな版種を使って作品を手掛けていたということが分かるかと思います。



《千曲川いざよふ波の岸近き宿にのほりつ》1907（明治40）年

鼎の創作版画の方向性というのは、『方寸』によく表れているかと思います。『方寸』の第1巻第2号に、「日本における創作的版画は今ただ我々の雑誌においてのみ見ることができる」という、ちょっと大仰に聞こえるんですけども、実際かなり凝った雑誌だったということが言えるかと思います。スライドに山本鼎が描いたカットや挿絵だけ抜いてみましたが、木版、木版とジंक版の併用、写真版などいろいろな版種を使っています。挿絵を入れたい時に、誌面とは別の紙に刷った版画を差し込むという方法（別丁）は結構取られるのですが、文字が刷られてある誌面に木版とか石版で絵を直接刷っていくという行為自体、すごく手間がかかることでした。『方寸』は、それをやっている雑誌なのです。これは、山本鼎が元は木口木版の職人でしたし、携わっていた石井柏亭も印刷局に出入りしていたということもあって、『方寸』のメンバーがみな印刷技術をよく分かっていて、印刷所の職工に対して自分たちで指導ができたのです。その様な印刷の知識と技術があってこそできた雑誌だったと言えるかと思います。そしてこの雑誌は版画を目指す若者にもすごく影響を与え、当時まだ中学生だった平塚運一がこれを読んですごく嬉しかったと言っています。

今、創作版画と言うと、もしかしたらタブロー的なというか、純粋美術としての版画のことを想像すると思うのですが、この当時はまだデザイナーがいなかった時代で画家や版画家が装丁もやって、挿絵も描いて、また、展覧会に出す絵も描いてと何でもやっていた。そしてそのどれもが創作であるという態度で制作をしています。様々な版種を追求もしていて、

適した版種が適した絵に使われている、技術が絵に生かされていることこそが創作的版画である、という態度を持っていたことが、鼎一人の作品をとってもよく分かるかと思います。

ちょうど時間となりましたので、最後に宣伝をさせていただきます。1999年から開催している「山本鼎版画大賞展」は、3年に一度実施しており、次回は2027年に記念すべき第10回を迎えます。第9回からは立体の応募も受け付けるようになりました。皆様のご応募をお待ちしております。ご清聴ありがとうございました。

（司会：遠藤）

山極さん、ご講演ありがとうございました。来年1月15日からパナソニック汐留美術館でスタートとなる「美しいユートピア展」の準備でたいへんお忙しい中、50回記念イベントということでお話しをしてくださいました。ありがとうございました。

（＊掲載画像はすべて上田市立美術館 所蔵・提供）

特別展「記念展示 現在版画の対話」関連イベント

クロストーク

パネリスト

野口 玲一 / NOGUCHI Reiichi

大坂 秩加 / OSAKA Chika

大橋 朋美 / OHASHI Tomomi

長田 奈緒 / OSADA Nao

常田 泰由 / TOKIDA Yasuyoshi

東尾 文華 / HIGASHIO Ayaka

松元 悠 / MATSUMOTO Haruka

王 木易 / WANG Muyi

進行：遠藤 竜太 / ENDO Ryuta

2025 年 12 月 20 日 15:00~16:40

於 第 50 回全国大学版画展授賞式会場（上田市立美術館）

遠藤： それでは、クロストークを始めたいと思います。記念展示「現在版画の対話」の出品者 7 名によるクロストークですが、皆さんからたくさんお考えを聞いて充実した時間にしたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。まずは、今回の記念展示の実行委員長を紹介します。三菱一号館美術館学芸員であり、版画学会の運営委員も務められている野口玲一さんです。では最初に、野口さんよりこの記念展示の開催趣旨を説明していただきます。

野口： こんにちは、野口です。本日はよろしくお願いいたします。現在、こちらの美術館の 2 階では、大学版画展に併設する形で特別展「現在版画の対話」を開催しています。まだご覧になっていない方は、ぜひこの後にお立ち寄りください。

今回の特別展は、大学版画展の第 50 回開催を記念したものです。発端は数年前、前会長の清水美三子氏が「50 回の節目に何かを行うべきではないか」とアイディアを出されたことでした。その後、内容については紆余曲折ありましたが、最終的に今回のような形にまとまりました。

現在、学会自体が過渡期にあります。はじめは「大学版画学会」として大学での活動がメインでしたが、それだけでは大学関係者中心の閉じた組織になってしまいます。より開かれた形にするべきだという議論を経て、名称から「大学」を取

り「版画学会」となりました。すべての会員のために開かれた組織を目指す中、今回も学会の将来を展望できるようなイベントにしたいという思いがありました。

将来を考えるためには、過去を振り返り、現在の姿を見つめ直す必要があります。そのため、展覧会の構成は「過去・現在・未来」を軸としました。過去の参照については、学会の沿革をパネル展示しています。中村花絵さんによるスタイリッシュで分かりやすいデザインですが、元資料は馬場章先生、有地好登先生らが検証・作成されたものです。また、過去 50 年の受賞作の蓄積をアーカイブ化し、5 つのディスプレイで 10 年ごとに区切って公開しています。中村会長の挨拶にもあった通り、70 年代、80 年代といった各時代の学生たちが、日常の中からどのような切り口で作品を作ってきたかという変遷が見て取れる展示になっています。

一方、「現在の姿」をどう見せるかについては、全国の各地区から現在最もアクティブに活動している若手の作家を推薦していただきました。それが、本日お越しいただいた皆様を含む出品作家の方々です。大学版画展の受賞者や学会に関わりのある方々が、卒業から時間を経て現在どのような表現を行っているかを示す、非常に多彩なアプローチの展示となりました。

この「過去の経緯」と「現在の作家」の姿が会場で交差することを、タイトルの通り「対話」として味わっていただきたい。その対話を経て、自分たちが版画や学会を今後どうしていくべきかを考える場になればというのが、本展の趣旨です。ぜひ会場に足を運んでいただき、何かを感じ取っていただければ幸いです。

遠藤： それではパネリストのお名前を紹介します。右から大坂秩加さん、大橋朋美さん、長田奈緒さん、常田泰由さん、東尾文華さん、松元悠さん、そして王木易さんです。

第 1 トピック：パネリストに聞く（学生時代から現在まで）

遠藤： では、最初のトピックに入ります。これから順番に指名をしていきますので、学生時代から現在までの作家活動について、ステートメントやエピソードを交えて自由にお話してください。そのあと野口さんから質問をしていただきます。まずは王さん、お願いします。

王： 王木易と申します。名前から分かる通り中国生まれで、両親も中国人です。ただ、5 歳から日本におりますので、実感としての母国語はほぼ日本語になります。家庭内では中国語、外では日本語という多言語環境で育った背景があり、文字や言葉、翻訳といった問題に強く興味を持ってきました。

大学は東京藝術大学の油画科に在籍していました。現代アートなども扱う自由な学科だったため、絵画にとらわれず表現方法を模索する中で「版画」に出会いました。文字と版画は、印刷技術という歴史的背景においても切っても切れない関係にあります。活版印刷や、お経の印刷である百万塔陀羅尼などの文脈から、当初は文字を彫る制作を行っていました。今映っているのは博士課程の時の作品です。美術というものを大きく捉えて考えていた時期で、インスタレーション的な表現を行っていました。この作品では、版画を彫り、それを石膏取りし、さらにフロタージュを行うという、反転を重ねた構造のインスタレーションを制作しています。

大学を出てからは、それまで考えていたことを一枚の作品に集約できないかと考え、紙を作るようになりました。自作した紙を版の上で乾かし、その凹凸に影をつけるといった制作を行っています。

版画家であれば、刷られたものよりも版そのものの方が美しいと感じる瞬間があると思います。先ほどの山本鼎についての講演で、「日本版画は線の外側を彫り捨てるが、西洋版画は彫った跡も筆のように使う」というお話がありましたが、その延長線上で版の存在を捉えています。彫って出したい部分と、彫り捨てられた部分、その両方を一枚の中で見せることを意識して制作しています。

野口： 割と卒業してからの変化が大きいかというか、学生時代の作品が漢字という表意文字を扱っていてアジア的な作品だなって思ったのですが、その後の展開がインスタレーション的なものから、いままた少し文字に帰ってきているように見えて、行ったり来たりして探っている感があると思うのですが、それ辺はどういうこと考えて変化しているのでしょうか？

王： 学生時代は「翻訳」という問題を強く意識していました。記号が記号でなくなる瞬間は様々あると思いますが、「コード」という方向で考えていくと、2014 年頃だったと思いますが、やんツーさんが、プロッターを用いて来場者が書いた文字の雰囲気だけを抽出して描く作品を発表されていました。それを見て、自分のやりたいことは最終的にこのような方向に行き着くのではないか、という予感がありました。ただ、自分は自分の手で作りたいという欲求が強く、究極的には絵を描きたいのかもしれないとも感じていました。コードとしての文字というよりも、カリグラフィーとしての筆記、文字を書くという行為そのものに関心が移っていきました。読めない外国語の文字が、時に絵のように見えるように、文字が絵であり、同時に記号にもなる瞬間があります。その境界を突き詰めたいと考え、現在の制作に至っています。



王木易《The Facet of Boundary》サイズ可変 2019 木版、木、石膏、グラファイト

遠藤： 次は常田さん、お願いします。

常田： 常田泰由と申します。この画像は 2002 年、東京造形大学の 3 年生の時に制作した、絵と言葉による作品のほんの一部です。絵と言葉をそれぞれ 1000 点ずつ、合計 2000 点で構成されています。絵は 10 センチ角のメモ帳に、最初は自分が見たものでしたが、次第に雑誌の写真なども見て描くようになりました。いくつかのルールを作っていましたが、その一つが「記憶で描かず、対象を見て描く」というものです。形の輪郭を目で追い、その動きに同期させるようにペンを動かし、100 枚、200 枚と連続して描いていきます。踊る人、組んだ手、枝と葉、上から覗いた箱など、自分でも何を描いたか忘れてしまったものもあります。言葉については、新聞などから「めぐすり」「ちくちく」「はれてたら」といった、脈絡のない単語を拾い集め、ひらがなのゴム印でスタンプしています。展示では絵と言葉を交互に並べ、偶然隣り合ったもの同士が意味をなさない、ランダムな状態を作りました。

ここからは制作の考え方について話します。私の制作は、あらかじめテーマを決めるのではなく、散歩中に写真を撮ったり、浜辺で貝殻やゴミを拾ったりする行為に似ています。発見と記録の繰り返しそのものが作品なのです。外側にある物事を自分に取り込み、自分が扱えるかたちに変換する行為だと思っています。

今回の出品作も、同様にして描いたドローイングを木版にしたものです。過去のドローイングを選び、コピーで拡大して木版にトレースし、忠実に彫ります。油性インクを和紙にプレス機で刷るシンプルな手法ですが、刷って終わりではなく、他の版を重ねたり、色を変えたり、コラージュしたりすることで、イメージ同士の新たな関係性を作っています。モチーフは男と瞳、男の顔、鏡、葉や小枝、地図のような形、階段、花瓶など様々で、特に意味を持った組み合わせではありません。組み合わせは、モチーフや図像だけではなく、色、紙やインクの質感も要素として扱っています。画像でわかりにく

いですが、会場では質感の組み合わせも感じてもらえるのではないと思います。

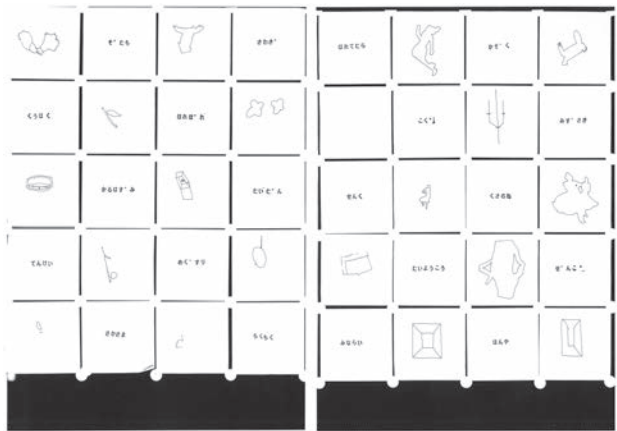
最後に、「リファインド（再発見する）」というタイトルは、ドローイングで発見した形を刷り合わせ、切り、つなげ、重ね、そして展示をする、という過程を通して自分自身が何度も繰り返し発見していく制作のプロセスを表しています。

野口：遠藤さん自身から説明がありませんでしたが、自作を紹介してもらう作家の順番については、実は遠藤さんが事前に決められていて、どういう趣旨でその順番を指定しているかというのは、作家の話を聞いていくうちにお分かりになると思います。

王さんと常田さんは、木版画で言葉や文字と絵の関係を扱っている。あるいは記号とイメージの関係を扱っている作家で、大きく見ると似たようなテーマにフォーカスしているのだけれどもアプローチが全然違うというのもお分かりいただけるのではないのでしょうか。

常田さんの作品がすごく面白いのは、木版画で制作されているのですが、木版のある種のウェットさが全くないのですね。非常にカラッとしているというか。絵柄の質もそうだし、対象に対する態度というのもそうだと思います。言葉とイメージを扱いながら、それに対して何か過剰な思い入れをしないようにしているというか、距離を置いて突き放して描こうとしているみたいなのがあって、そんなスタンスだからいろいろ組み合わせた時に何か不思議な面白い効果が出てくるということだと思います。

そこで伺いたいのが、学生の時は文字とイメージだったのだけれども、卒業後の作品はほとんどイメージとイメージの組み合わせというようになっているのが多いと思うのですね。そこら辺は何か気持ちの変化や考えの変化があるのでしょうか？



常田 泰由《ドローイング(2001-4000の一部をコピーしたもの)》
10 × 10 cm × 2000 枚 2002年 メモ帳、ペン、スタンプ

常田：今回は自分の制作が分かりやすいように文字の入った作品を選んだのですが、文字を前面に出す作品というのは実は多く無く、初期にいくつかあるぐらいです。ただその後、本の作品、アートブックをよく作っているので、物を指す文字の意味をどう扱うかということとイメージの関係というのは、改めて今回振り返ってみて、ずっと制作の裏側で意識していたのではないかと感じました。ありがとうございます。

遠藤：次は長田さん、お願いします。

長田：長田です。よろしくお願いします。モニターに映していただいているのは、学生時代に大学版画展の販売作品として作ったものです。当時は販売価格の規定が1000 円だったので、1000 円で売っていた作品です。今回、学生の頃の画像をくださいと言われて探してみても、卒業制作のような大作ではないけれど、久しぶりに見たら今の作品にかなりつながっているなと思い選びました。

今回の出品作は、Amazon の封筒の作品です。日頃からこのような日常的にあるものをモチーフにした作品を制作しています。モニターの作品は紙に刷られていますが、紙以外に支持体を選択できるというシルクスクリーンの特性から、修了制作ぐらいの頃から支持体をアクリル、布、木などにし、それ自体独立するような、オブジェ的な作品になっていきました。そうすると額に入れて壁にかけるのではなく空間に置くことができます。もちろん版で刷られたものとしての版画作品ではありますが、ある種の偽物が空間に置かれた状態を観るという経験を鑑賞者がすることになります。その経験の際に生まれる違和感とか気づきみたいなものに興味を持って制作しています。

最近では、作ったものをどうやって置くか、どういうところに置くか、展示の環境からモチーフを選ぶ意識が強いですが、それでも一貫して版画の技術を使って制作を続けています。

野口：とても興味深いです。最初の作品は、街で配っているティッシュのパッケージなのですね。今回の作品もそうですが、印刷物といえば印刷物、版画といえば版画なのだけれども、それが既製品っぽい顔をしているので作品っぽくないという、認識を揺さぶるところがすごく面白いと思います。けれどもそれは版画というもののある側面を捉えていて、正面から見るのではなくて横とか裏から見るような版画の別の機能というのに注目されているのかなという気がします。街で配っているティッシュも Amazon の封筒も、人に渡したり、あるいは郵送したりする。そういう伝えられていく機能、版画が持っている機能に注目しているということなのだろうと解釈をしているのですが、それでいいのでしょうか。版画の違う側面を強調して見せていて面白いと思いました。

長田：すごくありがたいです。野口さんがおっしゃってくださったようにモチーフを選んでいる確信はないのですが、中身を渡すために存在し、役目が終われば捨てられてしまう外側のパッケージ。ティッシュのパッケージも配送の梱包材もそうですが、そのようなどこ外縁的なものが気になっています。版画はイメージを複製して伝えていくために使われるという機能があり、なんとなくそれも少し外縁的なものになって思ったりしています。



長田 奈緒《tissue, Symbol or Symptom より》13.5 × 20 cm 2011
紙にシルクスクリーン、エンボス

遠藤：では、次は大橋さん、お願いします。

大橋：大橋です。今映していただいているのが大学院修了の時の作品になります。自身の体験から生まれた作品で、作品のテーマは失われた私のうちのある記憶の再創生・再考でした。記憶は誰しもが持つ生きる上で重要なものだと思っていて、だがそれを目の前に再現することはできないという点がすごく興味深いなと思っていた頃の作品です。版種は銅版のエッチングで、記憶の痕跡を版画で表現することを試みた作品になります。作品のテーマは今も根幹は変わらず記憶の再創生、再現化です。この作品にある足は私の足ですが、当時、すごい土踏まずだねと言われたのを今でも覚えています。土踏まずが、すごくへこんでいるらしいのです。(会場笑) 最近の作品は、モチーフが変わったのですが、自身の日記という記録をもとに作品を制作しています。石のように見えるものは、版画で制作し、その記録を石のようなものに投影するようなイメージで制作しています。これは、大学を離れてから小さいプレス機でも制作できるようにと考えたのがきっかけでした。その状況でサイズを可変にするために作品の形式を模索したところを、木を切り出して石のような形を作ってそこに刷った作品を貼り込むという方法に至りました。A3 程度のサイズで刷ることができれば、大きさが可変な木にどんどん貼り込んでいくことで、作品の大きさが変えられるという手法で、自分の中でも表現の自由度が上がったと

思っています。それが平面から物理的に突出する要素を作りたいという考えのきっかけとなっていて、平面の中で完結するのではなく画面空間を実体として立ち上げたいというコンセプトとなって、今もそのコンセプトで制作を続けています。以上になります。



大橋 朋美《The trace of memory》1120 × 90 cm 2011 エッチング、雁皮刷り

野口：長田さん和大橋さんの作品は、見え方としてはオブジェ的なものだけれども、そこには 版画って何なのだろうと考える中で炙り出されたものが作品に現れているのかなという気がしました。長田さんの場合には、移動・デリバリーというようなある種の版画の側面が強調されていたと思うし、大橋さんの場合は記録するメディアとしての版画という面が出ていたのだと思います。大橋さんの学生時代の作品にすごいびっくりしたのですが、かなり身体的というか、今の作品がどちらかというとコンセプトチュアルであまり過剰に痕跡を感じさせない作品なのですが、僕は扁平足なので見事にかなり立派な足だと思いました。(会場笑)

そういう今との違いがすごく面白いなと思ったのです。それでも今も日記とかをテーマにされているということで、痕跡を残す記録のメディア、つまり版画の記録性という面が出されていると思うのですけれども、同じ痕跡での記録として、最初の身体性が強い足の作品から今のそういうものが排除された作品には、何か考えの変化があるのでしょうか。

大橋：学生時代の作品も自身の体験が元となっています。3.11の時期に和歌山県の実家が、台風直撃による水害にあった家が半壊してしまい畳の部屋が全部泥にまみれてしまったのですが、そこに残った足跡を見て、人が生活していた空間にこのように痕跡が残るってすごいな、というのがきっかけでした。 大変な実体験から生まれたことが少し悲しいですが、

その時に気づきがあったというのですかね。だからちょっと捉えようによっては暗い内容のように感じますけれど、単純に暗い作品というわけではないのです。そこからコンセプトを記憶に絞っていったのですけど、やっぱりその作品の色味自体も少し暗かったのもっと色を使いたいなというところで、根幹は変えずに切り替えていこうとして今現在の作品のような形になってきました。

遠藤：では次に大坂さん、お願いします。

大坂：大坂です。 この作品は私が初めてリトグラフで制作した大学 2 年生の時の作品です。私は東京藝術大学の油画科に在籍していて、油絵を描いていました。壁ぐらいある大きな抽象を描いていたのですが行き詰まりを感じてしまい、3 年生から版画に移ろうかなという迷いのあった時期の作品です。 リトグラフは、色版（見当）を綺麗に合わせるというのも勉強になると聞き、これまでと同じ抽象画描いていてもあまり勉強にならないかなと思って、このような具象のリトグラフを作りました。大学に入っておそらく初めてモチーフを描いた作品です。自分はこれから何をやっていこうかという悩みがすごく大きかった時でした。その頃、大学外で舞台美術のお手伝いをしていて、平日は学校で制作、休日は舞台美術のお手伝いに行っていました。卒業したら舞台美術の方に進もうかなど、今後の進路について悩むこともあった時期です。

その頃、舞台美術携わっていたという経験もあると思うのですが、いまは自分で戯曲のようなものを最初に書いてから舞台を設定し、一人演出一人芝居みたいなことを作品の中で行なっていくようになりました。そして最近ではその絵の中に留まらず、実際にインスタレーションとしてセットを組んで、そこに一つのシーンとして、平面作品とそのモチーフにしている戯曲のテキストを繋ぐような展示を行ったりしています。今は、私はその様なインスタレーションもするし、版画も制作しますが、8 割くらいはペインティングを描いています。自分のことを「版画家」だとは思ってなくて、一つのメディアとしてこれからも版画を制作していきたいなと思っています。

野口：当時、抽象画を描くのは油絵の王道だったと思うのですけれども、そこから舞台美術的な作品に転換するというのはけっこう勇気がいったのではないかなという気がします。いま大坂さんの作品をどう理解するかといった時に、その舞台というキーワードによってすごくよく分かりました。聞いてみたいのは、転換をさりと話されましたけど、割と大きなことだと思いますが、何か大きくこれで方向転換していこうと思ったきっかけはあるのですか？

大坂：いや、特にきっかけっていうのはなくて、続けていった結果が今みたいになっているという感じです。今の制作スタイル（言葉をモチーフに、舞台をつくるように絵を描く）こそが私のやり方！としてしまうと、今後の長い制作活動が窮屈で退屈なものになっていってしまう気がするので、もしかしたら制作スタイルは全然変わっちゃうかもしれないです。そういった意味で特にここが転換期でした、というのではなくて。 ただ 一つ、あえて転換期がどこだったかっていうことをあげるならば、大勢でつくる舞台美術ではなく、個で向き合う版画を専攻することに決めたことだと思います。



大坂 秩加《うつつ》33.5 × 51.5 cm 2007 リトグラフ

野口：時代的なこともあるのでしょうかね。2000 年代、僕も美術の世界で働きながら思ったのですが、絵画の中でも抽象から物語的なもの復活が、神話であるとか物語の復活みたいなことがあったと思うんですね。 版画でも同じかと思うのですが、そういうのが後押しになったというのはあるのでしょうか？

大坂：そうですね、あると思います。リーマンショックなどの景気の変化もあったのだと思いますが、工芸的なもの・技術的で分かりやすいものというのが、改めて受け入れられる雰囲気になってきたという感じはありました。 私が物語性のある具象画をかきはじめたのはたまたまだったのですが、時期的にはこの頃だったなと思います。

遠藤：では、次に松元さんお願いします。

松元：滋賀を拠点に活動している松元と申します。題材は全て実際に起こった国内ニュースをベースにしています。リトグラフを用いる理由としては、リトグラフが、新聞紙などのメディアを作る印刷技術だったように、版画とマスメディアの関係性を自分の表現として取り入れたいと思ったのが、きっかけに挙げられます。特にリトグラフは、描いたものが

そのまま反転して絵として表出するという性質上、ビジュアルコミュニケーション的な役割があったかと認識をしています。ニュースを絵にする。ニュースを写真とか映像ではなく絵にすることをしていまだにやっているのは、例えば裁判所とかで犯人の絵を描く画家がそうですが、絵で物事を伝えるというのは歴史的にも残っていると思っているからです。実際に私も法廷画家を今やっていて、現在は、安倍晋三銃撃事件の裁判を担当しています。

まあそれはさておきまして、今回の出品作も、自身が拘置所で被疑者をスケッチしたことがきっかけで制作をしました。前提を申しておくのですが、まず作家のポジションとしては、新聞記者とかニュースを発信する側ではなく、あくまで視聴者側、情報の受け手側という認識です。実際に拘置所に行くことはありますが、そこで会話は行われないので、情報を受ける側の情報というのを頼りに、実際に現場に行ってみます。そのように当事者が見ていたであろう景色や関連する場所を巡って、絵にするための情報を自分で観察しながら収集していくという手法を取っています。それで当事者の像なのですが、ここで描かれているのは全部自分自身になります。理由としては単純で、自分がその当事者になりきること、そのニュースというのを自分なりに考え直した結果というところを表出するためです。

この作品は、とある冤罪事件で無罪を主張している被疑者が、初公判前に新聞記者からのインタビューの中で、牢屋から出たら何がしたいですかと聞かれた時に子供と料理がしたいということを言っていて、それが本筋とは関係のない願望だったりするところに引っかかって、実際に自分がその現場に行ってみて被疑者の家の周辺のスーパーに寄って、自分だったらどういう料理をしてみようか、など、事件とこの被疑者の感情みたいなのを自分なりに考えながら作るということを行っています。

野口：大坂さんから松元さんに話を繋いでくると、共通項として「物語的なもの」があることが分かると思うのですが、お二人はそのベクトルが真逆だということがすごく面白いです。大坂さんの作品は、舞台のように完全にフィクショナルというか、自分で設定を作って描いているのですが、松元さんの場合は現場派なのですね。ただジャーナリスティックに捉えるのではなくて、自分でそこに行って当事者の振る舞いに近いことをして何を感じるか、ということをテーマにされている。フィクショナルなことではなくて現実 に即している。そこで聞いてみたいのは、ある意味で事件に身を委ねることが、ある種自分の外側に表現の主体を預けるような経験に思えて、制作の態度としては珍しいと思うのですが、そのきっかけというのは何なのだったのでしょうか。

松元：元々私は法廷画家と関係なしにニュースを絵にすることに興味があって、先ほどもあった 3.11 の翌月に京都精華大学に入学したのですが、震災のことももちろんですが、実際に起こっている出来事を間接的に知っている自分が何に動かされているのか、という思いはずっと根底にあったかなと思っています。4 年生の時はまだ漠然と、それと版画との関係性について何も考えずにリトグラフが好きだったからということだけで作品を作っていました、だんだんとマスメディアによって全然知らない他人の出来事を日々受け取っている自分が、何に対して怒ったり悲しんだりしているのか、というようなところに興味が出てきたことがきっかけかなと思います。



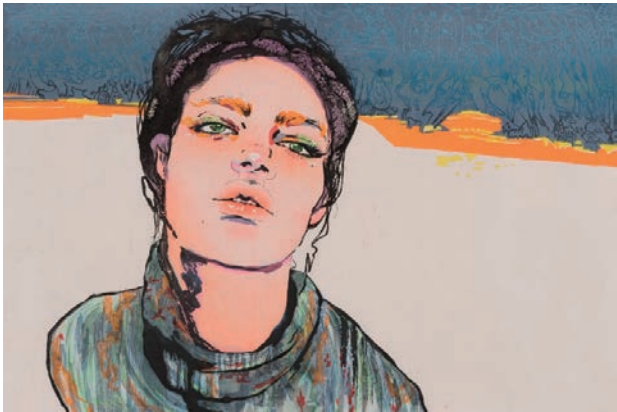
松元 悠《蓋》100 × 76 cm 2014 リトグラフ、コラグラフ、中性紙

野口：最初の、ただリトグラフが好きだから作るということから、今ではリトグラフが元々持っていた機能ということまで表現に結びつけて制作しているようですが、その辺のこともお話しいただけると面白いです。

松元：明治期に『風俗画報』というリトグラフで風俗を描いた本があったのですが、そこに報道画家と呼ばれる人たちが絵を描いていました。今は報道カメラマンがいて写真で伝えますが、それを絵で描く人たちのことですが、その中の一人に山本昇雲という人がいて、それこそ三陸で大津波が起きた時に現場に行ってその惨状を現地の人に聞き、自分で実際に見て絵を描いて、リトグラフにして人々に伝えることをしていました。そこでも石版画が広く伝えるという意味で機能していたのですが、それだけでなく、報道写真とは違って絵なので、偉い人の御真影を小学校から命からがら運び出してきた人が美談として描かれていたりしていて、写真ではできない部分が自分勝手でもあるのですが、作家の意思まで見えてしまうところが面白いなと思っています。 私の場合もかなり自分勝手なことをさせていただいているという感じです。

遠藤：はい、それでは最後に東尾さんお願いします。

東尾：東尾文華と申します。この作品は、大学院 2 年生の時に制作した作品です。水性木版 4 版と銅版 1 版で仕上げています。 水性木版をバレンで刷って一度乾かしたのち、湿し直して銅版画を刷るという工程を取っています。タイトルは『ホワイトスター』。白星、つまり勝ち星という意味で、自分が直面している問題に勝ちたいという意識の表れで、誰しもどこかで何かと戦っているのではないかと考えながら作った記憶があります。この作品もそうですが、私は主に女性をモチーフに制作をしています。技法は、水性木版だけか水性木版と銅版画の併用です。大学 3 年生の頃から、好きな版種同士を重ねればどういう風になるのだろうという興味本位から重ねてみて、大学院入ってからから本格的に併用技法の研究を始めて今に至っています。木版の木のぬくもりが女性の肌の柔らかさや肌の質感表現につながっていて、銅版画の鋭い線や深い色味が感情の積み重ねのイメージにつながっています。その二つを重ねることで、より自分のイメージに近くなるのではないかと想着制作を続けています。和紙に染み込む水性木版の層と銅版画の和紙に食い込むインクの質感、その水性と油性の対比をととても意識しています。一貫して私が大切にしていることは、メイクやおしゃれをすることで自信を持つように、女性が内に秘めている強さや自信を表現することで、作品を見てくださる方にも勇気与えられるような絵を作れたらいいなと思っ制作しています。最近、どこかに実在しそうな女性というものに関心があって、この子は何を考えていてどういう子なのだろう、と想像してもらえるような余白を残すことにこだわっています。



東尾 文華《White Star》56 × 84 cm 2021 水性木版、銅版画

野口：最初の作品をご覧になってお分かりになると思うのですが、人間にとってファッションがどういう存在なのかということを感じさせる作品だと思います。今のお話にもあったみたいに、メイクをしたり着飾ったりというファッションは、

人間の外側から取り付けるように思えるのだけれども、実はすごく内面にも働きかけている。作品を見てみるとファッションと女性が一体化しているような、今の話にもあったようにファッション自体もその女性の人格の一部になっているようなことを感じさせる作品だと思います。そこでこの3名の並びがどのように繋がるのだろうかと考えるのですが、どちらかというと東尾さんの作品は、大坂さんの作品に近いのかなと感じています。大阪さんの作品も人を元気づけるような感じがして、お二人とも、見る人を元気づけるものとして作品があるような気がしています。そのように見立てました。そこで無茶ぶりになるかもしれないけれど、東尾さんとしては、大坂さんと松本さんの後に話をするということで、何か作品の繋がりを感じるようなところありますか？ ちょっと聞いてみたいと思います。大坂さんと松本さんの作品と東尾さんの作品が何か共通項があるのではないかとということ、この順番で指名を受けたわけですが、それは遠藤さんの思い違いかもしれないので、聞いてみたいと思いました。

東尾：最初にこのグループ分けのお名前を見た時に、人物の作家でまとめてくださったのかなと思いました。実際に過去の学生時代の作品とかも見せていただいたことで、あらためて思ったのですが、見る人に伝える作品の主題をその作品に出てくる人物に委ねている、というところで共通している三人のグループなのかなという風に思いました。

野口：東尾さんの描く女性は、現実にいる女性ではないですよ。その女性のリソースになっているもの、元になっているものはあるのですか？

東尾：人物の版画を考えた時に最初に思い浮かぶのが浮世絵で、その中で一番魅力に感じているのが美人画です。また、SNSなどで可愛い女の子を見るのが好きなので、実在の誰かを描くというより、自分の趣味や記憶の中の素敵だなと思う要素を抽出して憧れの像に近づけています。同年代の女性を描いているつもりですが、自分が年を重ねるにつれ、絵の中に現れる女性も一緒に年を取っていくのかなと考えながら制作しています。

野口：浮世絵という言葉が出たのはびっくりしました。今話を聞いてもやはりフィクショナルなものということもよく分かるし、そこが大坂さんとも繋がるという気がしたところなのですね。東尾さんの作品が美人画だったら大坂さんの作品は役者絵ということになるのかもしれないなと思ったりしました。皆さん どうも貴重なお話 ありがとうございます。

遠藤：東尾さん、無茶振りのもとを作ってごめんなさい。御三方は人物表現ということもあるのですが、ナラティブという視点から比較してみたいなと、一緒に括りにしてみました。パネリストの皆さんありがとうございました。皆さんのお話から、現在の版画の多様性がよく伝わったのではないかと思います。

第2トピック：歴史の振り返りと「現在」の意味

遠藤：さて、第2のトピックとして学会の50年を少し振り返ります。展示会場に沿革をパネルにして陳列してありますが、このスライドで1974年の発足当時の部分を見てみます。「大学版画展は、版画教育の成果を学生及び社会に広く見せること」とあります。そして研究会の目的を、「日本の美術大学に版画教育の進歩発展を図る」とか、「教育体制の中に版画科を設置する」などの記載があります。このようにして、版画学会の前身である大学版画研究会は発足しましたが、それ以前、そこに至るまでに幾つかの要因、背景というものがあります。それを3つ挙げてみました。スライドの文を要約すると、国際展での版画家の活躍、東京国際版画ビエンナーレ展、版画教員の啓蒙的教育的志向性です。野口さん、この認識は間違っていないでしょうか？この頃ことを、簡単に解説していただけますか？

野口：まさにその通りだと思います。日本の特に戦後の版画の動向というものと密接に結びついていたということがあります。皆さんご存知の通り、戦後になって国際的な美術展でまず評価されたのが版画だったのですね。 国際展で棟方志功や駒井哲郎を始め多くの日本の版画家が受賞して、日本の戦後美術の中でも特に注目されたのが版画だったという状況がありました。ですが、実はそれより前からの版画家たちの活動というものが脈脈とあって、それは版画を日本中に広めていこうとする動きであり、一人の作家が評価されるだけではなく、より多くの作家を育てていこうとするような、それを啓蒙的教育的志向というように遠藤さんが書いてくださったのですが、そういう気風が強かったということがあると思うのです。それで、そういう日本の版画が評価されていることを追い風にして版画の制作教育というものを日本中に広めていこうという動きが加速して、美術大学に版画の教室を作って版画を教えることに繋がり、結果としてまた新たに作家が生み出されていく。その作家たちがまた活躍することで、さらに版画の世界が広がっていく。そのようなサイクルというか、生態系というか、そういうものを戦後の版画家たちが作ろうとしてきたのは明らかであって、その舞台とし

て大学版画学会があったのだと思います。なので、大学の中でどのように版画教育をするかというメソッドを共有するための場として大学版画研究会つまり版画学会がスタートしているのですね。そして、その共有が日本中の美術大学に広がっていった、そのメソッドによって育てられた版画作家たちが活躍していったのです。今もこの場がすごく面白いように、版画学会で作家が集まると、それぞれの大学が今どのような感じなのか、版画の状況はどうかかという共通の話題で話が繋がっていく、そういうところもこの学会の成果だと思うのです。例えば絵画の世界だったらアプローチや考え方の違いが大きすぎて、おそらくこのようにはいかないと思います。版画の人たちが集まると共通の話題ができてコミュニケーションができるということは、やはり共有できる歴史の蓄積があるからで、それは大きいことだと思っています。

遠藤：ありがとうございます。今の野口さんのお話のように版画を広めるという目的で大学版画学会を経て版画学会になってきたわけですが、その50年の活動の中で一つ大きな節目として挙げるとすれば、「版画年 04-05」というイベントだと思います。2004年から2005年にかけて行われたもので、版画学会30周年と山本鼎の「漁夫」から100年の記念ということで、04年から05年にかけての1年間を版画の年にしよう、という全国的なイベントがあったのですね。そのイベントでは、テーマ別の展覧会や会議、国際シンポジウム、そして当時の作家を三世代に分類して展示した「現代版画の潮流展」などが行われました。また、この頃が全国大学版画展に参加した大学数のピークでもありました。さて、ここからはまったく私の個人的見解なのですが、先ほどの野口さんのお話にもあったような版画家たちが学会創設当初から目指してきた版画教育の体系化というものが、「版画年 04-05」で一旦完成したのではないかと、つまりそれまでの版画学会の活動がああ時点で総括されたのではないかと、と思っています。そして「版画年 04-05」が、大学での版画教育が次の段階に移っていくターニングポイントであったのだと感じています。その様に考えると、今回の45歳以下の特別展のコンセプトがより鮮明になります。つまり、ポスト「版画年 04-05」、ポスト「現代版画の潮流展」という位置付けの展覧会として企画されていると言えるのではないのでしょうか。そこで野口さんにちょっと意地悪な質問ですが、今回のタイトルは「現在版画の対話」と付けられましたが、なぜ「現代版画」ではなく「現在版画」なのですか？

野口：今の遠藤先生の話は、すごく興味深い。ちょっと繰り返しになってしまいますが、2004年がエポックメイキング

な年で、山本鼎が『漁夫』を作った、つまり創作版画が始まって100年経った年であり、そして大学版画研究会から数えると30年経った年でした。その時に「現代版画の潮流展」というのが開催されたのですけれども、その2004年当時の版画学会が活動的と思われる作家たちを選抜した展覧会だったのですね。実は今回の特別展は、「現代版画の潮流展」の次の世代の作家を取り上げようということで、アンダー45として選んだわけですが、その意味では当時から世代が途切れずに繋がっているということになります。

ただ、2004年、5年というのが、戦後の版画の隆盛を経て広まっていった版画が一つのピークを迎えたという時期ということなので、おそらく遠藤先生は、そこあたりまでが現代版画なのだ、というように言いたいのかなと。つまり、いま僕らは実はポスト現代版画の時代を生きているのではないか、という問題提起だと思うのです。

2004年がピークというのは、ある意味ちょっと考えさせられることであって、日本の国の勢いというのが退潮していると言われていて、版画の業界というのも、実は2000年代から、この話の流れで2005年がピークだとしたら、その後、今いる私たちはどうしているのだろうか、どこにいるのだろうかということを考えるのですね。だから「現代版画」としないで「現在版画」としたのは、そのようなところを受けているということもあります。少なくとも時代的には、今の状況が当時と比べて変わってきていて、それを決して僕は衰退とか退潮だとは思わないのだが、少し違ってきていることは確かだと思うのです。だけど版画が実際どうなのかということとはよく分からない。分からないから現在の状況を見たいということで、「現在」というように言ったのだと思います。

それから、あともう一つは、現代美術とか現代版画と言うと、一つのムーブメントとして歴史化された状況があったり、メインストリームがあったりするように思うのですね。ある時代までは、例えば大きな版画を作るマキンググラフィカのように、版画の中にもある種のムーブメントがあり、それ以外にも何か歴史化された流れや分かりやすい動きがあったのですが、「現代版画」と言ってしまうと、そういうものを想像させるような気がします。つまり、版画の中に今、核心となる動向があって、その動向を見せるための展覧会をやっています、みたいな。また、そういうことをやらなければいけないのでは、というような気持ちにもなってしまいます。今回の展覧会は、それとは何か違うニュアンスにしたくて、いまの状況をそのまま素直に見せようとしたので、現在的な状況ということから「現在」というように名を付けたということがあります。だから例えば今日のこちらにいる作家も、いくつかの傾向に分けて、一つの括りとして皆さんに見てもらったけど、その中でもそれぞれアプローチがまったく違っているということが、お話聞いて明らかだと思います。何かバラバラな状況の

ようでも、僕はそれで版画が衰退しているとかピークを過ぎたとは全然思わないし、むしろ版画というものがそれぞれ個人個人のものとして多様化し進化ししていると思っていて、そうしてみるとバラバラとしか言いようがない現在の状況をもって現在版画ということにして、現代版画と区別してもいいのではないかなと思いました。

遠藤：分かりました。私も全然衰退だとは思ってなくて、現在はむしろ逆に面白くなっていると思っています。実際のところを見てみても、「版画年04-05」の頃から版画学会の創設期の先生方が次々と退職されていって、次の世代の教員に変わっていききましたし、それから今回取り上げませんでした、デジタル技術の普及というのも大きく背景にあって、版画の作品の感じがずいぶん変わりました。今日の出品者の方々の話を聞いていても、版画に対するスタンスがそれぞれでまったく違う。しかも自然体であるし、何かそこまで版画というものにこだわらないというか、一つメディア、一つのツールだというように捉えて制作しているなと思いました。そういう意味では、版画の絶対性みたいな、何というか、版画とはこうあるべきだ、というような時代とは大きく変わってきています。内側に向かっていたベクトルが外向きに変わったような感じで、すごく開けて面白い時代に入っているのではないかなと、そういう意味での質問でした。

第3トピック：将来への展望

遠藤：最後に、今後の活動や将来の展望についてお話しいただきます。今度は大坂さんからお願いします。

大坂：私は版画だけを制作をしているタイプではないので、この展覧会に呼んでもらったことに少し後ろめたさがありました。版画がすごく盛り上がっていた時代のことも先生方から聞いていたので、なんとなく今はそこを超えられないだろうという思いや、現代美術のカテゴリーの中では版画のみで制作をすると絞ってしまうのは表現として弱くなってしまうのではないかという、ちょっとネガティブなイメージがあって、。けれど先ほど、野口さんからすごく前向きに、バラバラに個々で版画を捉えて展開しているのがこれから楽しみだというようにおっしゃっていただいて、今すごく嬉しく心強い気持ちでいます。

現在私は、フィンランドのユバスキュラ美術館で開催中の版画トリエンナーレ（50周年記念展）に参加をしています。そこに参加している同世代の作家は、王道の版画制作をしている方が少ない印象でした。リソグラフからアニメーションを作っている作家や私のようにインスタレーションで参加し

ている人がいたり。版画というものをどのような捉え方をして発表するか、そこを作家もキュレーション側も楽しんでいる印象でした。歴史のある版画トリエンナーレではあるものの、版画をメディアとしてこれからどのように面白く展開していくかということを、やはり国外でもこと同じように考えているのかなと強く感じました。ですので、今後もこのスタンスで、自分が面白いなと思えるメディアの使い方、関わり方で制作を続けていきたいと思っています。

大橋：今回、自分の作品について振り返ってみたのですけれども、私の場合、失敗から生まれた作品が多いなというように感じていて、版画を使った制作というのは、間接的な表現行為だからこそ、予想しなかったことが起こったり、意図しない結果が起こったりするなというところの、偶然性というものを積極的に取り入れていきたいなと、改めて思いました。そして、版という適度な制限があるなかで、その制限をうまく利用しながら、自由度をさらに上げて、今後また制作を続けていけたらなというように思いました。

長田：この夏に町田の国際版画美術館の展覧会に参加させていただいたのですけれども、この大学版画展の収蔵賞で収蔵していただいた作品がそのきっかけでした。毎年大学版画展が開催され、学生の作品が50年分のアーカイブとして残っていて、そうした学会の取り組みによって自分の展示の機会があり、学会の何十年の積み重ねにとっても感謝しています。さきほど遠藤先生が、「みんな自然体でいいよね」とおっしゃっていて、私も本当にそう思っています。やっぱりこれまでの流れを見ると、版画を何とか確立しようというエネルギーによって版画が力を持って、持ちすぎたゆえに版画が苦しくなってしまったというような世代が私の上において、それからその雰囲気も過ぎ去り、「版画って面白いからやればいいじゃん」みたいな空気の中でのびのびやらせてもらっている世代なのかなと思っています。

今後の展望ですが、指標にしているようなものがあって、ブリンキー・パレルモという画家がいるのですが、三角をただ描く、みたいな作品のマルチプルがあって、それがちょっと特殊で、その三角を刷ることができるよっていう作品で、買った人はステンシルの型を使って青い三角を壁に描いていいです、みたいな。その作品はマルチプルなので、当然それにはエディションがあるんです。事前に刷られたものが複数あるのではなくて、刷るための版が複数あるという。なんかそれって版画をやっている人間からしたら、え、どういうこと？みたいな。そんな発想は全然なかったな、でも版画だし、版画の面白さを使っているし…というような衝撃を数年前に受けました。そのような自分がまだまだ知らない版画の面白さみたいなものを見つけながら制作していけたらいいなと思います。

常田：2019年ぐらいから、アートブックの作品を作っています。それは、自分作品の刷り損じや試し刷りをカットして再構成するようなものなのですけれども、版画と繋がりのある本であるとか印刷であるとか、そういうものをちょっと見ることで制作の方法も変わってきたような気がしています。アートブックのことなのですが、ワークショップもやっています。一般の人に絵を描いてもらって、その絵をバラバラにカットして、参加者同士で交換しながら一冊の本を作るというようなものなのですけれども、何かただ個人が作品を作るだけではなくて、版や本などのメディアが持っている、人と人との繋がりを作るという視点も、自分の制作の中に取り入れられるようになってきたのではないかと考えています。昨日も東京アートブックフェアというのに行ってきたのですけれども、すごく盛り上がっていました。人と人を繋ぐというような面も、今までちょっと忘れていた版画の面白い部分だと思うので、これから版画とアートブックの両方を制作していきたいなというように考えています。

東尾：版画が技術やジャンルの枠を超えて発展してきたものだと思っているので、これからデジタルであったり、異素材であったり、いろいろな組み合わせが進んでいくとは思のですが、そのような中で手での仕事や版の痕跡という身体的な要素も、より重要になってくると考えているので、私自身も、水性木版や銅版などによって版の特性を生かしながら、版表現の可能性を探っていけたらいいなと思っています。今後は、大型作品や空間を生かした表現などにも取り組んで、これまで作品を届ける機会が少なかった場所にも、発表の機会があればどんどん広げていけたらいいなと思っています。

松元：今日はありがとうございました。東尾さんの浮世絵の話を聞いていて、大坂さんの絵は役者絵かな、というところの次に、私については錦絵新聞なのかな、と言ってくれるかなと思ったのですけど。(会場笑) 私は民衆版画の歴史背景とかの学びもまだ全然ないですが、そこから何か引っ張り出す価値はまだまだあるかなと思っていて、そこで現在の版画家である自分というのがどのように生かせるか、というのはまったく分からないのですが、その価値付けをしていきたいなと思います。法廷画の仕事も、そのような表現をしていたら声を掛けていただいて始まったことですし、自分自身をもメディアに巻き込む、というか、そういう方向で最終的には風刺画を描きたいと思っていて、なおかつ自分自身も風刺されるような、自分自身をも風刺する、みたいな立ち位置ができないかなとか、いろいろ考えつつ切磋琢磨します。

王：版画全体について少しお話ししたいと思います。私は木版を制作しているのですが、木版や版画というのは、とても重く、遅い筆だと感じています。普通に描くことや、デジタル表現とは明らかに違う速度があります。

AIをはじめ、数か月単位で技術が更新され、世界がどんどん速くなっている中で、版画の持つ遅さや重さは、ものを見る際のピントを合わせ直してくれる存在だと感じています。これは学生時代から、もう10年以上前から思っていたことですが、今の状況になってより強く感じています。

だからこそ、逆にこれから版画は盛り上がっていくのではないか、という感覚もあります。

現在進行中の研究として、予算申請中のプロジェクトがあります。芸艸堂など、いわゆる版元の存在についての研究です。私は木版画が好きですが、分業による木版印刷も好きで、浮世絵から少し時代を下った昭和期の作品、例えば渡辺省亭など日本画家の絵を、分業の木版で複製する技術に強く惹かれています。

それらは浮世絵のように輪郭線が明確なものではなく、筆のかすれや滲みまで非常に精緻に摺られており、その技術の高さに驚かされます。一方で、創作版画では分業による印刷を否定することで表現を成立させるというセオリーがありますが、プロの職人の技術を知り、分析し、共に制作することで、別の意味での民主性や、新しい可能性が開けるのではないかと考えています。

もし予算が取れれば、非常に模写しにくい絵を題材に、職人の方々と分析しながら分業化を試みるプロジェクトを行いたいと考えています。それは非常に面白い試みになるのではないかと考えています。

総括

遠藤：みなさんありがとうございました。野口さん、最後に総括をお願いします。

野口：最後の皆さんのそれぞれの話がすごく面白く、貴重な話が聞けたなと本当に思います。だから、企画者としてちょっと欲張ってしまったというか、幅広い状況を見せたいっていうのを思うがあまりに、それぞれの作家の話をもっと深く掘り下げて聞くことができなかったというのは、少し残念な気持ちではあります。

それでも、いま聞いていただいて、それぞれの作家がそれぞれの課題を持って、そして希望を持って、制作されているということは伝わったのではないかなというように思っています。それから、もう一つ面白かったのは、それぞれの表現が多様だということがまずあったのだけれども、版画との距離感と

いうのもみんな違うのだなというのは、今回、思いました。

版画は一つのメディアで、そんなこだわらないっていう態度もあるし、もっと楽しむように版画と付き合うというやり方もあるし、すごく真面目に版画に取り組むというのもあって、版画との距離感というのもそれぞれみんな違っていて、そこも面白いなと思ったところです。

結果としては、多様な状況というか、ばらけた状況を示すということにしかならないのだけれども、ただ、それにしてもやはりその版画ということの切り口にして、集まって情報共有したり刺激したりすることができる場というのは非常に重要だと思っていて、これだけの作家の人たちが集まって、このようにいろいろな話を聞くことができるのは、やはり版画学会ならではだと自画自賛したい気持ちがあります。できれば、あらためてもっと個々の作家の姿であるとか考え方というのを聞く機会が持てたらいいなと思いました。

遠藤：内容が濃いというか、話が面白くて、予定の時間を過ぎてしまいました。本来なら質疑応答の時間を設けて、会場の皆さんから質問を受けるべきですが、進行の手際が悪くその時間がなくなってしまいました。申し訳ありません。もう終了の時間となっていましたので、これでイベントを終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



作品展示部門の出品者の選考について

作品展示部門出品者の条件と選抜方法

- ・出品者の条件は、45 歳以下の学会員。近年優れた制作をしている作家で、学会活動に対しての貢献が期待できる作家。
- ・出品作家の選考は各ブロックの運営委員が行い、それぞれのブロックに所属する学会員の中から規定数を選出した。

出品者数の決定方法

- ・出品者の人数は、美術館と実行委員会で検討し、展示会場の広さから、出品者は最大 25 名とした。
 - ・ブロックごとの出品者数の割り振りは、所属学会員数の割合で算出。具体的には、各ブロック所属会員数を 11 で割った。関東ブロックは所属会員が多数のため 4 名減で調整した。その結果は次の通り。
- 北海道・東北；2、関東(16-4)；12、中部・北陸；3、関西+中国・四国；5、九州・沖縄；3（合計 25 名）

選考結果と出品者数

- ・各ブロックでの選考結果は、1 名の辞退者を含めて予定より 3 名少ない出品者となったが、各ブロックの判断を尊重し、新たに補充することなく 22 名での展示に決定。各ブロックによって選考された人数は、以下の通りである。
- 北海道・東北；2、関東；11、中部・北陸；2、関西+中国・四国；4、九州・沖縄；3（合計 22 名）

- * 選抜から実施までの期間に運営委員の改選があったため、出品作家を選考をする委員の構成についてはそれぞれブロックに一任された。
- 参考までに、2024 年度と 2025 年度の各ブロック運営委員一覧を掲載する。

【作品展示 出品作家の選抜をした版画学会運営委員一覧】

2024年11月30日（土）
版画学会 定期総会

定数(2023～2024年度)	3	8(1名増員)	2	5	2	(1名減) 2	5	27
2023・2024	結城泰介（東北芸術工科大学）	生嶋順理（東京造形大学）	倉地比沙文 （愛知県立芸術大学）	田中栄子（京都市立芸術大学）	平木美鶴（徳島大学）	於保政昭 （大分県立芸術文化短期大学）	野口玲一（三菱1号美術館）	
	中村桂子（東北芸術工科大学）	清水美三子（女子美術大学）			→2024年度は児玉太一 （岡山県立大学）		三木哲夫（兵庫陶芸美術館）	
		笹井祐子（日本大学）		清水博文（京都芸術大学）	安井寿磨子（大阪芸術大学）		奥村泰彦（和歌山県立近代美術館）	
		鈴木吐志哉 （創形美術学校）		濱田弘明（嵯峨美術大学）	五十嵐英之（倉敷芸術大学）		都築千重子（東京国立近代美術館）	
	平垣内清（宮城教育大学）	高浜利也（武蔵野美術大学）	鎌谷充志（常葉大学）	濱田弘明（嵯峨美術大学）	五十嵐英之（倉敷芸術大学）	西川洋一郎（九州産業大学）	清水雄（上田市立美術館）	
		大島成己（多摩美術大学） →2025年度は菱田俊子 三井田盛一郎（東京芸術大学） 田島直樹（筑波大学）		池垣タタヒコ（京都精華大学）				
2024年度定期総会にて以下のように改訂承認								
定数(2025～2026年度)	3	9(1名増員)	3(1名増員)	6(関西と中国・四国が合併し6名とする)	3(1名増員)		5	29
地域ブロック	北海道・東北	関東	中部・北信越(改称)	関西・中国・四国(改称)	九州・沖縄	全国	総数	
都道府県数	7	7	9	7	9	8	47	
地域ブロックごとの都道府県名	北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県	茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県	新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県	大阪府、京都府、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山県、三重県	鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県	福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県	会長による追加委嘱	
2025・2026	○結城泰介（東北芸術工科大学）	○笹井祐子（日本大学）	○倉地比沙文 （愛知県立芸術大学）	○大西伸明（京都市立芸術大学）	○石橋祐一郎（九州産業大学）	奥村泰彦（和歌山県立近代美術館）		
ブロック長	中村桂子（東北芸術工科大学）	○田島直樹（筑波大学）	鎌谷充志（常葉大学）	池垣タタヒコ（京都精華大学）	於保政昭 （大分県立芸術文化短期大学）	齋藤千明（鹿沼市立川上澄生美術館）		
ピンク枠：新規	吉田潤（札幌大谷大学）	阿部大介（女子美術大学）	片山浩（名古屋芸術大学）	児玉太一（倉敷市立短期大学）	西川洋一郎（九州産業大学）	竹下悠（上田市立美術館学芸員）		
		大島成己（多摩美術大学）		清水博文（京都芸術大学）		都築千重子（東京国立近代美術館）		
		鈴木吐志哉（創形美術学校）		濱田弘明（嵯峨美術大学）		野口玲一（三菱1号美術館）		
		常田泰由（東京造形大学）		安井寿磨子（大阪芸術大学）				
		菱田俊子（個人）						
		ミヒャエル・シュナイダー （東京藝術大学）						
		元田久治（武蔵野美術大学）						

展覧会開催経緯および実行委員会組織と実施体制

- 2024 年 7 月 6 日の版画学会総会において清水会長の発案で、第 50 回全国大学版画展（2025 年度）に併せて 50 回記念特別展示を開催することが決定。内容については、外部運営委員（野口玲一、奥村泰彦、都築千重子）を中心に企画立案を行うこと、実施に向けて野口玲一を実行委員長として実行委員会を組織することが承認された。
- このようにして発足した実行委員会は、その年の秋に議論を重ね、以下の 3 つを柱とする展覧会を企画した。
- ①学会の沿革を資料によって展示。
- ②アーカイブした過去の大学版画展受賞作の画像映写。
- ③ブロック制を活用した今後の版画学会を担う若手作家（45 歳以下）の作品展示。
- 2024 年 11 月 30 日開催の版画学会総会において、実行委員会案が承認。実施に向けた体制整備のために、遠藤竜太を副委員長として指名。
- 2025 年 1 月、実行委員会は展覧会の概要・作家選考方法・3 つの部門の具体的な役割分担などの方針を決定。

- ①学会の沿革：草創期を知る有地好登、馬場章の両氏に検証を依頼。パネルのデザイン・編集は中村花絵に依頼。
- ②アーカイブ画像映写：蜂谷充志と常葉大学の蜂谷ゼミの学生がデータ作成。
- ③ 45 歳以下の学会員の作品展示：ブロックごとに出品者数を割り振り、各ブロック運営委員に作家選考を依頼。

- 2025 年 1 月 21 日、各ブロック運営委員に選考依頼の文書を送付。選考条件は、2004 年以降の大学版画展受賞者かつ現学会員とし、選考方法については各ブロックに一任。その後、条件を緩和したい（具体的には、大学版画展で受賞はしていないが近年優れた制作をしている作家、現在は会員ではないが今年度会員になってもらうことで学会に対しても貢献が期待できる作家も加えたい）との要望があり、検討した結果、各ブロックの裁量で例外を認めることとなった。

- 2025 年 5 月初旬、すべてのブロックの選考が終了し、U45 展出品者 22 名が決定。

- 2025 年 6 月 28 日、版画学会総会にて、展覧会タイトルを「記念展示 現在版画の対話」とすることが承認。関連イベントとして、上田市美学芸員による講演と、出品作家有志によるクロストークを開催する事も承認。
- 実施体制としては、田島直樹が搬出入に関わる業務を担当、パナーやキャプション・目録制作・その他展示に関するパネル制作を所彰宏、アーカイブ画像の映写用編集を柏木優希が担当することが決定。

- 8 月 29 日、有地好登、馬場章の両氏による沿革の検証をもとに、中村花絵デザインの沿革パネルが完成。
- 9 月 15 日、所彰宏によって目録やキャプションなどのパネル制作開始。柏木優希によってアーカイブ作品映写のための編集開始。
- 9 月 25 日、古谷博子学会誌編集長との会議で、WEB 版学会誌特別号（記念展図録号）を刊行することを決定。編集は遠藤竜太が担当。
- 11 月 22 日、ヤマト運輸のインストレーターと陳列作業。
- 11 月 29 日 版画学会総会にて経過報告と関連イベントの告知。
- 12 月 20 日 全国大学版画展授賞式の後に、講演「山本鼎の創作版画」と、クロストークを開催。
- 2026 年 1 月 15 日 作品の撤去・梱包・返送準備を行い、翌日以降に美術館より返送。

【実行委員会組織】

委員長：野口玲一
副委員長：遠藤竜太

●企画立案検討部会

野口玲一、奥村泰彦、都築千重子、清水美三子、中村桂子

【実施体制】

●沿革展示部門

野口玲一、遠藤竜太、清水美三子、中村桂子、笹井祐子

●受賞作品アーカイブス部門

野口玲一、遠藤竜太、蜂谷充志、中村桂子、笹井祐子

● U45 展示部門

野口玲一、遠藤竜太、田島直樹、中村桂子、笹井祐子、於保政昭、倉地比沙支、田中栄子、結城泰介

●特別協力

沿革編集：有地好登、馬場章

沿革パネル・デザイン・制作：中村花絵

受賞作品アーカイブススライド編集：柏木優希

U45 展キャプション・パネル・目録作成：所彰宏

●その他ご協力をいただいた方々

山崎敦子（上田市立美術館館長）、竹下悠（上田市立美術館）、大塚菜々美（上田市立美術館）、清水雄（上田市立美術館）、相澤美貴（たましん美術館）、 生嶋順理、古谷博子、元田久治、大橋朋美、常田泰由、宮寺彩美、加藤万結、田中千里、日高衣紅、古賀慧道、王敬昇

5 0 回記念特別展は、「過去・現在・未来」という構成が軸となっている。「過去」の部分は沿革をパネルで展示し、アーカイブ化した過去 50 回の大学版画展受賞作を 5 つのディスプレイに分けて映写。「現在」の部分は、全国の各ブロックから選抜された 45 歳以下の学会員の作品によって現況を見せる。そして、「過去」と「現在」が交差する展覧会場での対話が「未来」を考える機会を作り出す。野口実行委員長によって命名された「記念展示 現在版画の対話」というタイトルには、そのような趣旨が込められている。

展覧会場は、常設展示室の 2 部屋を使用した。入り口側展示室の中央に、創設時から現在までの沿革を調査・検証し、それを一目で分かりやすく視覚化したパネルを陳列ケースに入れて展示し、1470 点を超える膨大な受賞作のスライド映像は、奥の部屋の壁際に 5 台のモニターを置き映写した。アーカイブ作品の量とその内容は圧倒的で、それこそ版画学会の存在意義を示す重要な資料である。この記録集には残念ながら作家名を記したデータしか載せられないが、いずれ画像アーカイブがウェブ上で公開されると思う。そして、展示壁面には、全国から選抜された現在活躍している作家の作品が並んだ。多種多様の表現によって、現在の版画の自由な面白さが存分に伝わる展示となった。

また、全国大学版画展授賞式に合わせて関連イベントを企画した。一つは、山本鼎についての講演会である。上田市で開催という理由だけでなく、「現在」だからこそ版画の父とされる山本鼎の功績とその活動の本質を知ること意義があると思い、上田市立美術館学芸員の山極佳子様に講演を依頼した。創作版画は、個の自由な表現の獲得を目指す近代意識の中で生まれた運動であるが、今では自画自刻自摺という標語のみによって語られるため、その運動の本質が正しく理解されないことがある。講演の中で、山本鼎が日本版画と西洋版画をどのように捉えて運動に至ったのか、そして亜鉛凸版などの印刷技術を雑誌『方寸』や版画制作にも積極的に取り入れていたことなど、あまり知られていない事実が語られた。近年、社会とつながるメディアとしての特性が再認識されている「版画」だが、そもそもそれが山本鼎たちの運動の本質的な性質であり、あらためてさまざまな角度から包括的に知ることの重要性を感じた。講演に続き、もう一つのイベントとして出品者によるクロストークを行った。次世代を担う作家の多様な制作へのアプロー

チを参照し、これからの版画の姿を想像してみる、という意図である。作家の語る言葉には、それぞれの版画に対するスタンスが表れていて、内向していた意識が再び外側にも向けられはじめた「現在版画」の姿を率直に映し出していた。そして何よりも学生たちにとって、その多面性を知ること版画という領域における自身の居場所が明らかになり、そこでの挑戦に前向きな気持ちになれる、とても有意義な時間であったと思う。

今回の「現在版画の対話」展は、版画学会 30 周年記念イベント「版画年 04－05」の際に開催された「現代版画の潮流展」以降から現在までの期間に焦点を当てている。そのことから今回の作品展示を、ポスト「版画年 04－05」、ポスト「現代版画の潮流展」と位置付けてみたい。「版画年 04－05」には、1990 年代以降のデジタル化とグローバル化によってすべてが均質化していくことに対する批判的立場から、「版画」を世界に誇るべき日本特有の文化として再評価しようとする意図があったと思う。それは当時の脱西洋中心主義の潮流からしても、とてもタイムリーな試みであったといえる。そして同時に、その年の全国大学版画展への参加校がピークを迎えたことから分かるように、それまでの 30 年間の版画学会の活動が大きく結実したことを象徴するイベントでもあった。この時に、版画学会が目指した、日本における版画教育の体系化というものが完遂したといえるのではないだろうか。

しかし、一方で体系化することによって絶対的な規範となってしまう危うさも感じていた。創作版画運動は、個を解放するものであったのだが、「版画」が自らを閉ざすことによって内向きな志向となることへの危惧である。大学での標準化した教育が、かつての版画が備えていたメディアとしての柔軟性を逆に奪ってしまっていないだろうか？版画たらんとする教育に囚われて、かえって表現の幅を狭めているとは言えないだろうか？という問いが、「版画年 04－05」以降の 20 年間の私たちの課題であったように思う。その意味でも今回の出品者の「版画」に対する多様なスタンスは、この 20 年の変化を反映しているといえる。

最後になるが、紆余曲折ありながらも展覧会が無事に成功裡に終えられたのは、なによりも充実した作品で版画の現況を明瞭に提示してくれた出品作家のおかげであり、また、きめ細かく配慮してサポートしてくださった上田市立美術館の山寄敦子館長をはじめ学芸員の皆様と、大学業務が多忙な中でも時間を割いて力を貸してくださった学会員の方々のおかげである。ここに深く感謝の意を表したい。そして、この「記念展示 現在版画の対話」記録集が、半世紀にわたって「版画」の研究と教育に取り組んできた版画学会の活動を記録し、僅かでもこの稀な学会のさらなる発展に寄与するものとなる事を切に願っている。

展覧会

特別展 「記念展示 現在版画の対話」

会期：2025 年 11 月 29 日（土）- 2026 年 1 月 12 日（月）

会場：サントミューゼ 上田市立美術館 常設展示室

主催：版画学会、上田市・上田市教育委員会

※第 50 回全国大学版画展と同時開催

関連イベント

日時：2025 年 12 月 20 日 14:00~16:40

会場：第 50 回全国大学版画展授賞式会場（上田市立美術館）

講演「山本鼎の創作版画」

講演者：山極 佳子（上田市立美術館学芸員）

クロストーク

野口 玲一 / 大坂 秩加 / 大橋 朋美 / 長田 奈緒 / 常田 泰由 / 東尾 文華 / 松元 悠 / 王 木易 / 進行：遠藤 竜太

図録

版画学会学会誌特別号

特別展「記念展示 現在版画の対話」記録集

発行日：2026 年 3 月 10 日

編集・発行：版画学会事務局 九州産業大学芸術学部

mail：cuapsjoffice@gmail.com

〒 813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1

編集責任者：遠藤 竜太（武蔵野美術大学）

デザイン：遠藤 竜太 所 彰宏（武蔵野美術大学）

* 版画学会の Web のみでの発行

http://cuapsj.org

記念展示 現在版画の対話

← 上田市立美術館
コレクション展



「記念展示 現在版画の対話」記録集

版画学会 2026